
春眠

海土龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春眠

【Nコード】

N6626D

【作者名】

海土龍

【あらすじ】

『寒椿』から数ヶ月後、ゆずると久久コンビは中学3年生になった。今回の依頼は、ゆずるの異母妹である優香からの依頼。なんでも、友達が一週間も眠り続けているのだという。

1・誰かの陰謀としか思えん！（前書き）

『寒椿』（<http://ncode.syosetu.com/n5907d/>）の続編です。

1・誰かの陰謀としか思えん！

サーカスが来たよ

陽気な音楽、楽しい曲芸

笑い 笑い 笑い

ハラハラ、ドキドキ、思わず息を呑む

拍手 拍手 拍手

サーカスは夢

夢の世界

永遠の夢さ

疲れる現実から抜け出そう

現実なんて忘れてしまえばいい

捨てちゃえよ

ほら、なんて、楽しいんだ

白塗りの顔、だぶだぶ衣装、おもちゃのラッパを吹き鳴らせ

プー

プー

プーーーーー

今日もピエロは、笑ってる

「またかよ!」

掲示板を前にして、少年はしゃがみ込んだ。

「小一から中三まで、九回もクラス替えがあつたつていうのに、俺は一度も数と同じクラスになったことがない！こ・れ・は、誰かの陰謀としか思えん！」

少年こと、大伴直久は、この春、中学3年生となった。

去年から急激に伸びだした身長は、現在、167cm。まだまだ伸びる予定である。

声も幾分か低くなり、美少年とは口が裂けても言えないが、それなりに整えられた顔も、年齢に応じて大人びてきている。……とはいえ、その行動には、まだまだ幼さが溢れていた。

立ち上がる気力なく、その場に頭を抱えていると、自分そっくりの顔が覗き込んできた。

直久同様の成長を遂げている彼の双子の弟　数久である。

「陰謀？　オーバーだなあ」

兄に比べ、おっとりとした口調のためか、大人びているように見える。が、けしてそんなことはない。

むしろ、数久の方が質の悪いガキだということは、付き合いが長い程たつぷりと身に染みて分かることになるだろう。

「数とゆずるは、また同じクラスじゃなか。つーか、違うクラスになったことないんじゃない？」

ゆずるといふのは、双子たちのいとこのことだ。彼らの母親が、ゆずるの父親の妹なのである。

「うん。僕とゆずるは、毎年、同じクラスにして貰えるように、校長先生にお願いしているからね」

「はあ？」

当然の事のようにサラリと話すので、危うく聞き逃すところであった。

「お願いしてる、つて……。それ、インチキつて、言わねえ？　つか、だったら、なんで俺も同じクラスにしてくれ、つて頼んでくれないんだよ？」

「えー、だつてえー。直ちゃんまで同じクラスだったら、忘れ物をした時の貸し借りができないじゃない。しかも、よく忘れ物するの、直ちゃんの方だからねっ」

「けどさー。なにも俺らだけで貸し借りしなくともさ。他のクラスにも友達いるし、そいつらに借りればいいじゃんか」

「なんで？ 他の人に頼らなくなつて、僕が貸すつて言ってるんだからいいじゃない。それとも何？ 直ちゃんは僕に物を借りるの嫌？」

「嫌、っーか……」

雲行きがおかしくなってきた。直久は言葉を詰まらせる。こんな風に、自分の言いたい事もろくに言えず、相手にうまくかわされてしまつのは、大抵、直久の方だった。

ちっ、またか……と、心の中では舌打ちする。

だが、何だかんだ言つても直久は、この、しっかり者で頭の良い片割れのことと自分のこと以上に好きだった。

直久にとって数久は、生まれる前からずっと一緒にいた存在で、誰よりも自分の近くにいて、誰よりも自分を理解してくれる『もう一人の自分』だった。

例え、世界中の人という人が自分の敵となつてしまった時でも、最後の最後まで味方でいてくれるのは、きっと数久だとさえ、直久は思う。

双子と言つても、二卵性双生児なら、偶々同時に生まれてしまった兄弟姉妹だが、直久と数久は一卵性双生児だ。

元は一人の人間として生まれてくるはずであつたモノが二つに分かれ、二人の人間として生まれてきてしまった。そのことを思うと直久は、どうしても数久を自分の一部かのように扱ってしまうのだ。数久が嬉しい時、自分も嬉しい。数久が悲しい時、自分も悲しい。

この程度なら許されるだろう。だが……。

自分がこう思っているのだから、絶対、数久もこう思ってい

るはずだ。

自分は今とても楽しい。だから、数久も楽しんでいるに違いない。そう思い始めた時、直久は数久という人格を無視していることになる。

数久は自分とは違う人格を持った一人の人間なのだということを、完全に頭から消し去ってしまっているのだ。

一つの受精卵が二つになった。その時から、一人は二人になり、けて再び一人に戻ることはないのだと、直久は最近になってようやく理解した。

数久は自分ではない。自分とは違う。

離れていく距離は、日に日に大きくなっていくけれど、それでいいのだ。

いつまでも一緒にいたいけれど、自分ともう一人との境界線があらゆる状態ですつと一緒に居続けていいものではない。

自分は自分。

最後は自分一人で死の扉を開けなくてはいけないのだから、離れていく距離がどんなに寂しくうと、それを縮めようとしてどちらかが、あるいは両方が無理をするようなことがあつてはならない。

そう、直久は悟ったのだ。

けたたましく予鈴が鳴り響いた。鞆を持ち直した数久は、それじゃあ、と言って、自分の教室に行こうとする。

「ホームルームが終わったら、ここだね。一緒に帰ろうよ」

「あー、うん」

そんな、気の抜けた返事を聞くと、数久は背を向けて直久から遠ざかって行った。

この日は、今年度最初の学校ということで、授業があるわけでも

なく、ただクラス分けが発表され、始業式に出て、ホームルームを終えたら、それでおしまいだった。

4つある3年のクラスの中で、直久のクラスがどこよりも早くホームルームを終える。

ホームルームの長さは担任の性格の違いなのだろう。

直久の担任は若い体育教師だった。見かけは美人だが、キビキビとした性格と口の悪さで、生徒たちには怖いと評判だ。

実際、怒ると尻尾を巻いて逃げ出したくなる程、怖い。だが、余計なことをダラダラと話さないし、表情の違いがはっきりと分かるところは、他の教師たちよりよほど良いと思う。

内容がない話を長々とされることほど、泣きたくなるものはないだろう。

良い担任に恵まれたことを感謝して、直久は教室を出た。

この学校では、3年生の教室は4階にある。ちなみに、2年が3階で、1年は1階、2階は職員室や事務室等がある。校舎は『口』の字形で、4階建てだ。

3年生を4階の教室にしたのは、おそらく部活引退後の運動不足を少しでも解消させてやろうという学校側の心遣いなのだろう。

だが、受験勉強疲れの3年生に少しでも体力を消耗させないようにしてあげようという心遣いはないのだろうか？

そんな不平もちらほら聞こえる中、それでも直久は、眺めの良い3年の教室を気に入っている。

普段と視線の位置が違っただけで、楽しくなってしまう性分なのだ。

しゃがみ込んで見上げるのもいいが、やはり、高いところから見下ろす景色の方がおもしろい。

視野が広がって、どんな悩みも一瞬で解決できるような気になるからだ。

今朝、数久と別れた掲示板の前に行くと、直久はそれに目を向けた。朝見た時と変わらない内容にそつと息を吐き、ふらふらと窓辺

に歩み寄つて外を見下ろした。

悪戯好きな春風が草木を弄び、花びらをむしり取っている。どんなに必死に抗つても、風相手に花びらはひたすら翻弄されてしまう。

空高く吹き飛ばされた桜の花びらが直久の元まで流されてきて、踊れるだけ踊らされ、散々弄ばれた後、地面に放り捨てられた。

どうして、花がきれいに咲く時期に限って風が強いのだろう。夏場の蒸し暑い時にこそ、この風が欲しいのに。

なにも一年に一度の見せ場を邪魔することないじゃないか。

3月の終わりに咲き始め、4月の初め頃にはもう半ば散ってしまったている。

早い木には緑色のものさえ見える。地面に広がる白い絨毯は数ミリの厚さを持ち、踏みつけられ薄汚れている。咲き始めて、あっという間に散ってしまう彼女たちに魅せられ、直久は回りの音さえ忘れ、目で追い続けた。

どのくらいの時間が経つただろう。開いた窓から一枚の花びらが舞い込んできた。

白いドレスを着たあどけない少女を受け止めようと、直久は手を伸ばす。

彼女は、ひらりひらりと直久の手から逃れると、くるりくると舞いながら床に降り立った。

尚、手を伸ばそうとすると、どこからか風が吹き抜け、彼女は再び舞い上がった。逃げていく彼女を追って、直久は顔を上げる。すると、桜の花びらの向こう側に、呆れた顔が見えた。

「何やってんだよ」

ガリガリというわけではないが、この年齢の少年にしては細身で、どことなく頼りない印象のあるこの人物は、直久のいとこのゆずるである。

ゆずるが頼りないというのは、もちろん、性格など内面的なことではなく、見かけの話である。

茎の細い花のような、強い風で折れてしまいそうなイメージの話だ、あくまでも！

「あんまり、桜の花を見んなよ」

「なんで？ そんなの俺の勝手じゃん」

花びらを追い回していたのを見られたのだと知って、直久は照れ隠しにわざとつつけんどんに言い返した。

すると、ゆずるの方も短く言い捨てた。

「取り憑かれても知らねえよ」

「取り憑かれる？」

「春は、そういうのが多いんだよ」

「そういうの？」

「気が弛んでいるから、つけ込まれやすいんだ」

「つけ込まれる？ 何に？」

聞き返してばかりいると、次第に、ゆずるの機嫌が悪くなっているのが分かった。

「魔物にだよっ」

魔物……。現実離れた単語に直久は言葉を失う。

そうなのだ。このいとこ、いやいや、我が家系の内では、こういう現実離れた単語が、余裕で日常会話に登場してくるのだ。

なぜかと言うと、うちの家系は代々霊能力 と言って良いものか、とにかくスゴイ力を持った者たちが頻繁に生まれる家系だからだ。

1000年とちょっと前、大伴泰成という人物が妖狼との間に子どもをつくったことが、事の発端らしい。

なんでも彼は、当時大活躍していた陰陽師安倍晴明に対抗するために、強力な式神を探していたんだと。

そして、銀色の雌狼と出会ったのだとか。

本当かよっ、とツツコミを入れたくなる話なのだが、彼はその妖狼との間に女の子を儲けたらしい。

その女の子 小夜こそが俺たちの祖先なのだ。

そんなわけで、妖怪の血を少なからず受け継いでいる我が家系には、妙な力を持った奴が多い。

中でも、ゆずるは小夜の直径の子孫だから、計り知れない力の持ち主だとか。その気になれば都市の一つや二つ軽く破壊できるらしい……マジでえ？

この生きる最終兵器　九堂ゆずるは、床に落ちた花びらを拾い上げると窓の外に放った。

白く細い指から放られた花びらは、ヒラリと風に乗って、どこかに消えてしまった。

直久の視線に気が付いて、ゆずるが振り向いた。形の良い眉を寄せる。

「見んなって、言っただろ」

「んなの無理だつて。だつて春だし。そこら中、桜ばっかだぜ」

「さつきみたいに、じつと見るなつて言っているんだ。お前、魅入っていた。取り憑かれる一歩前だった」

声を荒げるゆずるに、直久は両手を広げて降参のポーズをとる。

すると、ゆずるはそれ以上何も言わなくなるのだ。

これは、つい最近知ったゆずるとうまく付き合っていく方法の一つだ。

それまで、いとこだというのに、ゆずると直久は何となく気が合わなくて、お互いに避けていたところがあった。いとこだし、同じ中学校に通い、学年も同じとくれば、嫌でも顔ぐらい合わせる事になってしまふのだが、それでも極力会わないようにしていたのだ。

それが、ついこの前の春休み、数久を加えて3人で出かけたことよって、二人の距離は究極に縮まった。

会えば言葉を交わすようになったし、一緒にいる時間が前より苦にならなくなっていた。

「けどさ、せつかく咲いてんだから、見てやらないと可哀想じゃん」
「可哀想？　俺、あんまり、桜、好きじゃない」

「へ？　なんで？」

日本人は桜が好きだ。好きと言うか、特別なものだと思っている。

他の花が咲いても、何とも言わなくせに、桜が咲くとやたら騒ぐのだ。

そんな典型的日本人である直久には、桜が嫌いだったゆずるの気持ちに分からなかった。

ゆずるは窓に背を向けると、壁に寄り掛かった。直久と並ぶと、ゆずるの方が頭半分ほど、背が低い。

それを悔しがっているゆずるは、めったに直久と並んで立つことがないのだが、この時はそのことを失念していたらしい。

「俺、小さいころ、桜の木の魔物に襲われたことがあるんだ。数や鈴加さん、他にも何人かの親戚の子どもと遊んでいた時だった」

鈴加というのは、直久と数久の4歳年上の姉だ。ゆずるは悔しさを吐き捨てるように続けた。

「根もとに白い手が現れて、俺の足を掴んだんだ。土の中に引きずり込まれそうになった。鈴加さんが助けてくれなかったら、どうなっていたか」

「そんな時、俺もいた？」

「いねえーよ。いるわけないだろ。お前、俺と遊ぶの嫌がってたじゃんか」

「そっか」

ゆずるが嫌いだけじゃなく、直久は本家に遊びに行くことさえ嫌いだった。

年末年始と特別に用がある時以外、本家に近寄らないようにしていた。

「それに、桜ばかり騒ぐから、他の花が霞む。桜なんかより綺麗な花は、いくらでもあるのにさ。だいたい、数多ければイイみたいに咲くし、散った後は汚いし、夏場は毛虫がわんさかいるし。桜のどこがいいんだ？」

聞かせて貰いたいと、直久を睨め付ける。その目を受けて、直久は肩をすくめた。

「確かに、そうかもしれないけどさあー。散る瞬間は、どの花よりも綺麗だと思うぜ。ほら、見ろよ。なんか、雪みたいじゃん」

「馬鹿っ。見んなって！」

再び窓の外に向いた直久の目を、ゆずるは慌てて塞ぐ。そのあまりの慌てぶりに直久は吹き出してしまう。

「お前、桜が嫌いなんじゃないかって、怖いんだろ？」
「なっ」

真っ赤に染まった顔を見る限り、凶星らしい。

まあ、実際に魔物に襲われた身としては、怖くなってしまっても仕方がないか。

直久が、してやったり、とニタニタ笑っていると、無言で拳が飛んできた。

直久は、反射神経だけは自信がある。それをひょいっと避けて、舌を出すと、ようやくやって来た待ち人の背に逃げ込んだ。

突然盾にされた数久はどうしたの？と直久に振り向き、それから、ゆずるの顔を伺った。

ゆずるの顔で、だいたいの二人の間の空気を読むと、それを打ち破る笑顔を浮かべて、

「お待たせ、二人とも。さあ、帰ろうね。一緒に！」
と言い放った。

一緒に、という言葉がやたら強調されて聞こえたのは、たぶん、ゆずるや直久だけではなかったはずだ。

たちまち空気の流れを変えられてしまい、振り上げた拳を下がるしかないゆずると、逃げる気力も奪われた直久は素直に数久に従うしかない。

ゆずるがどんなに桜を怖がろうと、一番恐るべきものは、この力ズマイルなのではないかと思う直久だった。

1・誰かの陰謀としか思えん！（後書き）

『蛭狩り』（<http://ncode.syosetu.com/n6689d/>）へ続く。

2・ちゃんと説明をプリーズ！

二人の数歩前を、黙って歩いていたゆずるの足が止まったのは、昇降口を出てすぐだった。

同じクラスのくせに、どうしてゆずるより遅いのだと、数久に問い詰めていた直久は、危うくその背中にぶつかりそうになる。

「なんだよつ。急に立ち止まるなよ」

ギロリと睨んでやるが、当のゆずるは直久の方をちつとも見てくれない。

に、に、睨み損？

嫌味も相手に通じなければ意味がないように、睨んでも相手が見てくれなければ、なんの効果もない。

諦めて、ゆずるが見つめている先に目を向ける。すると、校門の所に、ちんまりと座り込む女の子の姿が見て取れた。ふわふわとした感じの可愛い子で、どこぞの危ないオヤジに見つかったら、そのまま横抱きにされて、かつ攫われそうなカンジである。

どこかで見た覚えがあるぞ、と小首を傾げた時、隣から小さい声が聞こえてきた。

「優香ちゃんだ」

「ゆづかちゃん？」

顔を横に向けると、数久が頷いた。

「ほら、ゆずるの妹だよ。会ったことあるでしょ？」

「あつたっけ？」

めったに本家に行かない直久は親戚関係に疎い。おじおばレベルでさえ、あやふやなのである。

そんな直久を情けないと思うだろうか？

だが、それも本家九堂家と、その分家である大伴家の家系図を見れば仕方がないことだと分かってくれると思う。ハッキリ言って、

網目なのである。

いとこ同士の結婚が非常に多い為、あらゆるところで横に二重線が走り、縦線を見難くしているのである。

誰が誰の親だって？ 誰と誰が兄弟姉妹で、誰と誰が夫婦なんだ？ ああ？ ……と、まあ、ややこしいこと、この上ないのだ。

おそらく、例の妙な力をより強く保とうとしているせいなのだろう。特に本家は、いとこ同士でしか結婚しないことになっているらしい。

実際、ゆずるの祖父母も両親もいとこ同士だし、過去にいとこを妻にしていない当主は存在しない。

ゆずる自身もそのうち、いとこの中から妻を選ぶことになるんだろうな。

直久は、ぼんやりとそんなことを考えた。

ゆずるにとつて、いとこと言えば、父親の妹の娘である鈴加と、母親の妹の娘が2人と、同じく母親の弟の娘が1人いる。その4人の中から選ぶのだろう。

直久の脳裏に一人の少女の顔が浮かぶ。

愛羅というその少女は、直久たちより一学年下だが、同じ学校に通うゆずるの従妹だ。確か、ゆずるの母親の弟の娘だ。年も一番近いし、何より愛羅自身が乗り気なのである。

会う度にゆずるに対してラブ光線を放出している様子は、端から見て痛いほどであった。

ちなみに、愛羅の母親は、俺たちの父親の妹でもあるから、俺にとつても従妹だったりする。

ほらほら、ややこしくなってきただろ？

さてさて、話は戻って……。

直久は優香のことを思いだそうと、ゆずるの後に付いてゆつくりと優香に歩み寄った。

優香の名前をゆずるが呼ぶと、俯いていた顔が跳ねるように前を見た。そして、ゆずるの姿を認め、ぱあっ、とその顔を輝かせた。

「ゆずる兄さま！」

ゆずるの腰までもない背丈の幼い少女が、両手を広げて駆け寄ってきた。

その身体を受け止めると、しばらく、ぎゅうつと抱き締めてから引き離し、片膝を付いて、ゆずるは妹と目線の高さを同じにする。

「いつたい、どうして、こんな所に？」

「どうしても、ゆずる兄さまにご相談したいことがあったの」

そう言った優香のうるうるした瞳が、ゆずるの背後にいる双子たちをようやく映した。

あつ、と小さく声を漏らすと、深々とお辞儀をする。

「こんにちは、直兄さま、数兄さま」

この、やたら礼儀正しい挨拶に、直久は額を抑えた。
思い出した！思い出したあ！

6歳のガキとは思えない礼儀作法。丁寧な口調。いかにもお嬢様っぽい雰囲気。

正月、本家でよく目にする子どもだと、直久は認識した。

これで優香もめでたく、直久の、顔と名前一致する親類リストに仲間入りしたわけだ。

「こんにちは、優香ちゃん。ゆずるへの相談は、僕たちがいたら邪魔になる？」

「うん。直兄さまも数兄さまも、ぜひ聞いてほしいの」

優香の必死の様子に、ゆずるは首を傾げる。

「大切なことなら、ここじゃなくて本家に来てくれれば良かったのに。その方がゆっくり聞けるよ」

「急ぐ話なの。だから、少しでも早くゆずる兄さまに会いたくて。」

「ごめんなさい、学校まで押し掛けちゃって」

自分が学校まで来てしまったことが、ゆずるにとって迷惑だったのだと思っただけ、優香はしょんぼりとする。だが、すぐに、そうじゃないと首を振られて、笑顔を取り戻した。

優香は自分の兄のことを両親よりも、誰よりも慕っていた。

きれいな容姿も自慢のタネだったが、九堂家の次期当主として九堂家が所有する神社の祭儀を取り仕切る姿は、『かつこいい』以外の言葉では言い表せなかった。

それは普通の兄妹ではないからこそ、よりいっそう強まる想いだった。

ゆずると優香は兄妹と言うが、異父兄妹だ。

ゆずるの父親は九堂家の長男で、ゆずるの以前に次代様と呼ばれていた人物だ。

だが、彼は、ゆずるの母親との婚約が決められていた時からすでに、別に想う女性がいて、妻が子を身籠もつたと知るや否や、その女と家を出て行ってしまったのだ。

身重の妻に離婚届だけを残して、九堂家を出て行ってしまった彼は、当然、次代としての資格を失い、二度と九堂家並びにその分家の敷居を跨ぐことを禁じられた。

直久はこの話をつい最近、数久の口から聞いた。

「浩一伯父さんにとって、自分に代わる跡取りがいれば、自分が家を出ていっても文句ないだろ……みたいな感じだったんだと思うよ」数久は淡々と語ってみせたが、その中に隠しきれない怒りの感情が直久にまで届いてきたのを覚えている。

ゆずるの父親　浩一伯父さんは、結婚後、わずか4ヶ月で離婚届を妻に突き付けた。これほどまでの仕打ちを受けても、ゆずるの母親は何も言わない人だった。

彼女は、言われるままに結婚し、ゆずるを身籠もり、離婚に応じたのである。

離婚後、それでも彼女は、ゆずるの母親であり続けようとしていた。そのため、離婚当時20歳だった彼女は、両親や、ゆずるの祖父母が勧める再婚の話に頑として首を縦に振るうとしなかったのである。

この先の生涯を一人で生きていくと固く決めていた彼女を説得し、再婚させたのは、8歳のゆずるだった。

相手は、九堂家当主が選んだ人で、直久たちの父親の弟にあたる人物だった。またもや言いなりの結婚だったが、今度のものは彼女を幸せにしてくれたらしく、まもなく両親共に望まれた子どもが生まれた。

それが優香だ。

ゆずるの妹とさえ、優香は本家の子どもではないので、本家で暮らすゆずるとは別の家で暮らしている。

二人が会うのは、どちらかがどちらかに会いに行った時か、もしくは祭儀の時など特別な時のみだ。

わざわざ会いに行った時はともかく、祭儀の時の二人の距離は家と家の距離よりも遠く感じ、優香はゆずるのしやんと伸びた背中しか見ることが叶わなかった。

兄は次代様、自分は単なる分家の子ども。

家と家の距離よりも、年の差よりも、その違いは果てしなく大きいのだ。そんな遠い兄を優香がどんなに憧れに想っているか、その瞳を見れば瞬時に分かることだろう。

対して、ゆずるは、自分の動作一つで一喜一憂してしまう妹を可愛がつてはいるが、どこか苦手に思っているようだった。

彼女が無邪気に笑えば、つられて笑顔を見せるが、それも次第に引き彎つたものになってしまうのだ。

優香が無条件で慕ってくれればくれるだけ、ゆずるは苦しそうな顔をする。

それが何故なのか、この時の直久には分からなかった。ただ、この時も、ゆずるが苦笑を漏らしながら優香の頭をゆっくりと撫でているのを、じっと黙って見つめていた。

「それで、急ぐ話って？」

優香の気持ちが落ち着くまでの時間を十分にとってから、ゆずるは訊いた。

「実は、ゆづかのお友達がずっと眠ったままなの」

「眠ったまま？」

「うん。りえちゃんっていうんだけど、ゆづかの幼稚園からのお友達なの」

「ああ、莉恵ちゃんね。俺も何度か会ったことある子だよね？」

「うん、そう。それでね。明日、ゆづか、小学校に入学するでしょ？ りえちゃんも一緒に入学するの。でも、りえちゃん、眠ったまままで起きてくれないの」

「起きてくれない？」

ゆずるは話が見えないと、眉を寄せた。

優香は明日、小学校に入学することになっている。直久やゆずるたちも6年間通った小学校だ。

大好きな兄が通っていた学校に通うのは、優香にとって、とても楽しみなことで、2ヶ月も前から、入学式の日時を何度も聞かされていたゆずるは、そのことをよく知っている。

一緒に入学するのだという友達のことと数人聞かされていて、莉恵という子もそのうちの一人だ。

だが、その子が眠ったまま目覚めないとは、いったいどういうことなのだろう？

「優香、もう少し詳しく話してくれ」

真剣な顔を見せた兄に、優香はコクンと頷いた。

「あのね、ゆづかも今日知ったことなの。明日、一緒に小学校に行くって、お電話したの。そしたら、りえちゃんママが、りえちゃん病気だから行けないって言ったの。風邪？って聞いたら、違うって……。どうしたの？って聞いたら、分からないって。おつきい病院に行っても、お医者さんはどこも悪くないって言って、帰されちゃったんだって。けどね、りえちゃん、一週間も眠ったままなの」

「一週間も？」

驚いた顔で、ゆずるは数久を振り返った。その目を受け止めて数久は頷く。

数久も優香の前で膝を折ると、彼女の肩に手をそっと置いた。

「りえちゃんは一週間も眠ったままなの？」

数久の優しい問いに、優香は首を縦に振る。

「優香ちゃんは、りえちゃんに会った？」

「うん。お見舞いに行っただけど、どうしても、りえちゃんの家に入れなかったの」

「どうして？」

「なんだか、とっても怖くて……」

うるうるした瞳から、今にも大粒の涙がこぼれ落ちそうになる。

数久は優香の肩を2度ほど優しく叩くと、大丈夫だよと繰り返した。

「ゆずる」

「ああ」

ゆずると数久は頷き合う。その、二人だけが通じ合っちゃってます……という雰囲気には直久は憤慨する。

「ど〜ういうことだよっ！ちゃんと説明を、プリーズ！」

ぎゃあ、ぎゃあ、と騒ぎまくる直久に、ゆずるは眉をひそめた。

「うるさいな、お前は！」

「だってさ、俺だけ蚊帳の外でさー、二人だけで分かっちゃってますってえーの、なんか、すごい悔しいじゃんか。俺だって、仲間に入れて欲しいじゃんか。そりゃあ、俺は0能力者だけどさー。一応、俺も優香ちゃんにとって従兄なわけだし……」

そうなのだ。

都市の一つや二つぶっ壊せるほどの力を持っているゆずるの従弟である俺は、なぜか、全くそういう力を持たずに生まれてきてしまったらしい。

ゆずるの父親である浩一さんにとって、直久たちの母親である彰子が唯一の妹であり、その息子たちは、分家の中でも本家筋により近い者ということになる。

例の妙な力は本家が一番で、そこに近い血筋ほど強いとされているから、当然、直久は強い力を持って生まれてくるはずだったのだ。

ところが、全くの0！　霊一つ見えない眼を持って生まれてきてしまった。

これが、直久が本家に近寄らない理由の一つでもあった。

親類の者たちは、きつと双子の弟に全ての力を取られて生まれてきてしまったのね、と哀れみの目を向けてくるだろうし。その、まるで欠陥品を見るような目が、嫌で、嫌で、堪らなかった。

今だから認めることだが、自分が今まで九堂家の力や歴史について興味ないように振る舞っていたのは、そんな目から逃れるためだった。

どんなに哀れみの目を向けられようと、自分はそんなこと、ちつとも気にしていないんだという態度を取りたかったのだ。

だけど、その力の為にゆずるが悪霊たちに狙われたり、苦しんでいる姿を見てしまったあの時から、九堂家のこと、ゆずるのこともっと知りたいと思うようになっていた。

今まで、興味ない、そんなこと知りたくもないと思っていたことだが、今はすごく知りたい。

少しでも多くを知りたいから、自分だけがのけ者にされるのは、絶対に嫌だ。

そんな直久の気持ちが通じたのか、ゆずるは少し微笑んで、

「魔物が取り憑いた可能性があるんだ」

と、答えてくれた。

「魔物？」

「さつきも言っただろ？　春にはそういうのが多いんだって。その子に会って、実際目に見えないと分からないけれど、夢魔かもしれないな」

「むま？」

適切な漢字さえも思いつかない直久が首を傾げると、数久が空に指を滑らせて『夢魔』と描いてくれた。

「文字通り、夢に関わる悪魔のことだよ。夢魔はおおざっぱに2種類に分けられる。夢魔自身と、その夢魔が見せる夢のことを『ナイ

トメア』と言つて、この悪魔が見せる夢は悪夢なんだ。つまり、恐怖を与える悪魔」

「ナイトメアか。それなら知ってるぜ。ゲームとかによく出てくるからさ。馬面な奴だろ？」

「そう。けどね、分かんと思うけど、ナイトは夜。メアは古い英語で霊を意味していたから、ナイトメアは元々『夜の霊』という意味だったんだ。それが、後世ではメアが牝馬を指す言葉とされるようになった、絵画とかで、炎に包まれた馬で表現されることが多くなっているんだよ。　だけど、実際のナイトメアが馬の姿をしているかどうかっていうのは……ちよつとね。僕もまだ会ったことがないから、分からないや。……そして、もう一方はインキュバスまたは、サツキュバスと言つて、この悪魔は淫魔なんだ」

「いんま？」

再び直久が首を傾げたので、数久は空に漢字を書かなければならなかった。

「淫乱の『淫』で、悪魔の『魔』。分かる？」

「オーケー」

「インキュバスは男性の夢魔で人間の女性を襲い、子どもを生ませる。サツキュバスは女性の夢魔で人間の男性と交わつて精子を集めると言われている」

うわつ。なんか、数の口から、襲うとか、交わるとか、精子とか言われると、聞いているこつちが照れてしまうじゃんか。

ぎゃあゝ、いやあゝん。数うったら！

「サツキュバスが集めた精子をインキュバスが人間の女性の腹に受精させるらしいんだけど、インキュバスとサツキュバスは同じもので、時として変身して使い分けているのだとも言われているんだ。ともかく、この二つの悪魔はナイトメアと異なつて快樂を与える夢魔なんだ」

きゃあゝ、快樂だつてえゝつ。恥ずかしいゝ。

「……つて、ちゃんと聞いているの！直ちゃん！」

「も、もちろんだよ、数」

「だったら、そこで、どもるのやめてくれる？」

数久の怒気溢れる声に、直久はピシッと顔を引き締めて答えた。
だが、なんと言つても、わずかなエロっちい単語にも反応してしまつたお年頃。次第に口元が緩んできてしまう。

数久は大きく首を横に振ると、ゆずるに向き返つた。

「6歳の子どもをインキュバスが狙うとは思えないから、たぶんナイトメアだと思うけど。ちゃんとこの目で見てみないとね」

「そうだな。急いだ方がいいのも確かだ」

悪夢から一刻も早く救つてやりたいと言つて、二人は立ち上がった。だが、そんな二人の顔を交互に見つめながら直久は、はて、と思う。

「なあ、聞いていい？」

「何？」

答えたのは数久で、ゆずるは無言で振り返つた。

「さっきからカタガナを連発しているけどさ。カタガナ名の相手に、お前らの御経もどきつて通用するの？」

「……」

「……」

狩衣姿で印を結んだり、お札を貼つたりしていた数久の姿を思い出して言い放つた素朴な疑問だったが、思いがけず、直久は二人に大打撃を与えてしまったようだった。

3・夢の中に入る？

結論。『まあ、なんかなるだろう』……というわけで、優香の友達の家に向かうことになったのだが、その玄関まで来て、ゆずるも数久も優香も、そろってその歩みを止めてしまった。

一人平然とした顔でインターフォンを押した直久は、不思議に思っ
て振り返る。すると、真っ青な3つの顔がそこにあった。

優香は地べたにしゃがみ込み、俯いて胸を押さえている。その横を見ると、数久も膝を着き、苦しそう息を荒くしているし、かろうじて膝を折っていないゆずるも気分が悪そうに、壁に背中を預けている。

「何なんだ？ お前ら、どうかした？」

「お前こそ。何なんだよ？」

驚いて尋ねると、逆に驚かれ、聞き返されてしまった。

「直ちゃん、あのね」

側に来るようにと手招きされ、直久は数久の脇に跪いた。

「今、この家を中心に、ものすごい妖気が漂っている……んだけど……」

……？

切れ切れに言われた言葉に、直久は首を傾げる。

「へー」

「何も感じない？」

「全然」

さすが直ちゃんだ、と言って、数久はバツタリと直久の腕の中に倒れた。

本気で気絶したわけではない。双子の兄が、あんまり鈍感なので気が抜けてしまったらしい。

「数う、おーい、しっかり！」

ペシペシと軽く数久の頬を打つと、直久はゆずるの方に目を向け

た。 ゆずるの額にじつとりと汗が噴き出ている。

「おそらく、一つの場所に魔物が長く居続けていた為に、この場所の気が汚れ、他の魔物まで集まってきてしまったんだろう。俺たちにとって、この場所は危険だ。家の中は、もっと魔物で溢れているだろうし」

「じゃあ、どうすんだよ！」

家の中に入ることができないと言われて、直久は狼狽える。

そんなに強い妖気がここに漂っているのだろうか。自分には全く感じられないだけに、ぞっとする。

だが、家に入らねば、莉恵に会うことができないし、夢魔を抜うこともできない。

どうするんだ？と、今度は答えを求めるように訊くと、ゆずるはゆっくりと口を開いた。

「夢魔が取り憑いていると思われる優香の友達を、本家に移動させて、そこで夢魔を退治する」

「本家に？」

「あの家の周辺には魔を近寄せない結界が張り巡らされている。

その昔、小夜が張った結界だと言われているものだ。それが確かかどうかなんて俺は知らないが、他の場所よりも俺たちにとって有利な場所だつてことは間違いない」

ゆずるは空に目を泳がせた。何かを見ているようだったが、それが何であるかは、何も見えていない直久には分からない。

「ここに集まってきている魔物は、一匹一匹が浮遊霊なんかとは比べものにならないほど扱いづらいヤツらだ。それをこんな数だけ集められる悪魔なら、相当の力を持ったヤツなんだろう」

ゆずるに不安の色が浮かぶ。

普段あんだだけ勝ち気で、傲慢な奴にそんな顔されると、そこから目を逸らしたくなる。

直久は、分かったと短く答えると、玄関の向こう側から近寄ってくる人の気配に応える心の準備をした。

大伴泰成が妖狼に生ませたという娘　小夜は、九匹の妖狼を式神として従えていた。そのため、九狼の巫女と呼ばれていたらしい。その『くろろ』という音が『くどう』と変わり、『九堂』となり、それが小夜の直系の子孫の名字となったと言われている。

また、代々の九堂家の当主は九狼様と呼ばれ、小夜が使役していた妖狼を式神に持つ。

九匹の妖狼たちは、それぞれに一つずつ社を持ち、その内の一つを本家が、他の八つを九堂家の分家である大伴家が所有していた。直久の家も妖狼の社を敷地内に持つていて、先見神社と呼ばれている。父親は一応、神主みたいなことをやっていて、直久自身は近所のおばさんたちに『先見神社の子』などと呼ばれていた。

石階段を上がると、やはり石で造られた鳥居が見えてくる。

登ってくる者をさらに高い位置から見下ろすその足下には、『朝霧神社』と彫られていた。その下をくぐると、やたら立派な社が姿を現してくる。

この神社は、一見、ごく普通の神社のように見えた。だが、社を守る狛犬の姿はなく、賽銭箱のような物も置いていない。社の中にも鏡などの祭具はいつさい無く、畳を敷かれた八畳ほどの部屋と、その両脇に板張りのただ広い部屋があるのみだ。

神社の後ろに古い造りの家があって、社の両脇の部屋とは長い廊下で繋がっている。

この古い日本邸こそがゆずるの暮らす家で、歴代の九堂家当主が生まれ育ち、受け継いできた家なのだ。

一足先に本家に行つたゆずるたちを追って、直久は莉恵とその両親を連れて本家に向かった。

本家に近付けば、近付くほど、直久の気が滅入り、頭が痛くなつていった。

たぶん、精神的なものなのだろうと思う。

親族たちの嫌な目つき。自分だけが力を持たずに生まれてしまったことへの劣等感。

それらが、直久の知らないところで苦しみとなっているのだろう。頭を抱えながら、門をくぐり、玄関に手を伸ばした。その時。

「痛っ」

伸ばした指先に、針を突き付けられたような痛みを感じて、思わずその手を引っ込めた。

どうしたのだろう、という不思議そうな眼差しを背中に感じながら、直久はもう一度、手を伸ばした。

バチンッ。

今度は小さな爆発音が直久を拒んだ。

「あおう」

申し訳なさそうな声をかけられて振りかえると、莉恵の母親と目があった。その後ろには莉恵を抱く父親の姿がある。

「どうかなさいました？」

なかなかドアを開けようとしないう直久を不審がつて、そう尋ねてきた彼女に直久は苦笑した。

「いえ」

次こそはどんなに拒まれようと構わない気持ちで、ドアノブに手を伸ばした。だが、直久の手が届く前に、それは自らガチャリと音を立てて回った。

「何してんだよ？」

玄関の内側から顔を見せたのは狩衣姿のゆずるだった。直久に冷やかな瞳を向けると、その後ろの親子には軽く微笑んで、

「どうぞ上がってください」

と、玄関を広く開いた。

ゆずるが案内した部屋は、畳64枚分の広さを持つ和室で、狩衣

姿の数久と優香が着々と準備を整えていた。部屋の中には布団が敷いてあり、その枕元にはコップ一杯の水がある。

布団を囲むようにビー玉より少し小さい半透明の玉がいくつも並べられてあり、部屋の四方の壁にはお札が貼ってあった。

布団に莉恵を寝かせるように指示を出すと、両親には別室で待つように言う。

優香さえ部屋から追い出してしまうと、ゆずると数久は静に眠っている少女の顔をじっと覗き込んだ。

黙って見つめること数分。ようやく口を開いたのは数久の方だった。

「思った通りだったね」

「ああ」

「思った通りって？」

二人だけで納得して終わりにされて堪えるかと、つかさず直久は聞き返した。

「霊が取り憑いて昏睡状態になる場合もあるけれど、この子の場合には霊じゃない。本当に眠っている、ぐっすりと。夢魔に憑かれているんだ」

「ああ、夢魔ね」

先程聞かされた話を思い出して直久は頷いた。

霊に取り憑かれた場合のパターンは数多くあるらしいけど、大抵は身体を乗っ取られて、本人の意思に反して行動してしまったり、言葉を話してしまったりするらしい。

直久が出会った霊に憑かれた人と言えば、つい数ヶ月前に会った少女、紫緒さんがいるけれど、彼女の場合もボーっとしてはいたが、目を開けて動いていた。

要するに、霊に憑かれた場合、ずっとじっとしてられないで、フラフラ動くというわけだ。

「夢魔っていうのは、思った通りだったけど、その力の強さについては予想外だったね」

「そんなにヤバイ相手なのか？」

「ん〜」

眉をひそめて低く唸る数久に、直久の咽がゴクリと鳴った。

「ねえ、ゆずるは夢魔を退治したことある？ 僕は初めてなんだけど」

「俺も初めてだ」

「げっ。マジでえ？」

「すごく弱い悪魔なら退治したことがある。そんな時は聖水ぶっかけたら、あっさり消えてくれたけど、今回ののは、そうもうまくはいかないだろうな」

「そうだよ〜」

うわっ。なんか、めっちゃ不安なんですけどっ。

直久はゆずると数久の顔を交互に見つめると、そう言えばと手を叩いた。

「じじいは？ じじいに手伝って貰えばいいじゃんか」

「お祖父様に？」

お祖父様と偉そうに言われる人物は、ゆずると双子たちの共通の祖父である九堂家の当主だ。彼以上の強い力を持った者は、おそらく存在しないだろう。

名案だと思つたそれに首を振つたのは、ゆずるだった。

「お祖父様はいない。今は京都の方へお出かけになられている」

「京都？ なんでまた？」

「毎年この時期になるとお出かけになるんだよ。ほら、春だから」

「春だから？」

「魔物がうじゃうじゃ出てくるから、仕事時なんだよ」

「なんだよ、そりゃー。魔物っていうのは、蛇か蛙の一種か何かなのかよ？」

「別に魔物は冬眠しないよ。単に、春は人間の方が浮かれていますから、付け込みやすいんだよ」

「そういうわけで、お祖父様はいらっしゃらない。お祖母様もお前

が来ると言ったら自室に籠もってしまった」

「ばばあは、初めから当てにしてねえよ」

嘘か本当か、イタチの妖怪を父親に持つと言われる祖母は、直久のことをひどく嫌っていた。

それは、単純に相性が合わないからという理由ではないようだが、その本当の理由を直久が知るわけがなかった。

嫌っていると言うよりも、脅えているような目を会う度に向けられては、直久もいい気はしない。

いつからか、直久も祖母を嫌うようになり、お互いになるべく避けるようにしていた。が、直久よりも祖母の避け様の方が極端で、誰の目から見ても明らかだ。これも直久を本家から遠ざけた理由の一つだった。

兄の祖父母に対する口の悪さに苦笑しながら、数久は言い放った。

「じゃあ、僕たちでやるしかないね」

二人が頷くのを確認して話を進める。

「夢魔は、憑かれている人から引き離し、退治するのがベストなんだけど。今回の場合、夢魔の力が僕たちの手に負えないくらい強すぎるから、追い払うのがせいぜいだと思う。　　追い払う、つまり、この子から引き離す方法は読経っていうものもあるけど、たぶんそれは効果がないと思うんだ」

「やっぱり、カタガナ名だからか？」

「そうじゃなくって。基本的に東洋の妖怪も、西洋の悪魔も、人間が作り出した負の感情だという点で同じものなんだよ。だから、御経でも、聖書の言葉でもどちらでも効果があるんだ」

「でも、言葉が通じないだろ？　日本人の幽霊には日本語で、アメリカ人の幽霊には英語で説得しないと成仏してくれないって聞いたぜ」

「どこで？」

「テレビで」

「……」

「……」

「ねえ、ちょっと疑問。アメリカ人の幽霊は成仏するものなの？」

「成仏っていうのは、死んで仏になることだぞ」

「……」

「……」

「……」

しばらくの沈黙後、直久のマヌケな声が、

「あー、じゃあ、アメリカ人は死んだら何になるんだ？」

と響いたが、誰一人としてそれに答える者はなかった。

「で、話を戻すけど。今回の夢魔に御経の効果が望めないと言ったのは、そのくらいで追い払えるような弱い相手じゃないからだよ。だから、今回、僕たちが取る方法は莉恵ちゃんの夢の中に入って、莉恵ちゃんを叩き起こすっていう方法がいいと思う」

「夢の中に入る？」

「外からどんなにやってもダメなら、内からやらなきゃってこと。」

夢の中にいる莉恵ちゃんに会って、夢から叩き出すんだよ。夢から覚めちゃえば、夢魔は莉恵ちゃんから出て行くしかないもんね」

これで万事解決、と言い切った数久に対して、ゆずるは形の良い眉を歪ませた。

「夢の中で夢魔と鉢合わせしたら、簡単にやられてしまうな。夢はヤツらのテリトリーだから。危険極まりない方法だが、それしかないと言っのなら仕方がない」

「それで、どっちが夢の中に入る？ それとも二人で？」

ゆずるは、上目遣いで見てくる数久にゆっくりと首を横に振った。「夢の中に他人が入ることで、この子に影響を及ぼすかも知れない。その対処にどちらかがここに残る必要がある。それに、万が一、夢の中で夢魔と遭遇してやられそうになった時、残った方が起こしてくれれば逃れることができるかもしれない」

「それじゃあ、僕が夢の中に入るから」

「駄目だ」

ゆずるは数久の言葉を途中で遮った。

「俺が入る」

「えっ、ダメだよ。危険だよ。そんな危ないこと、ゆずるにはさせられないよ」

そこまで言って、数久は、しまった、という顔になって慌てて口を閉ざした。

「どついう意味だ？ それは」

「どついうって？」

「俺が……だからか？」

「違うよ、ゆずるが次代だからじゃないか。次代に何か遭ったら、大変だからだよ」

怒鳴るゆずるを宥める数久。直久はその二人の間に口を挟めずに黙って様子を見守っていた。

「お前が夢の中で夢魔と遭遇するより、俺が遭遇した方が助かる確率が高い！お前なんか、一瞬で殺されるぞ。逃げる暇なんかない！」

「そうかもしれないけど、でも、だけど、ゆずるにそんな危険なことをさせたなんて知れたら、僕、お父さんやお母さん、親戚中に怒られちゃうよ。だからさ、今回は大人しく」

「じつと数の帰りを待っているってか？ ふざけんな！安全なところで、のらりくらりとしていて、九堂家の当主になれるかあっ！九堂家の当主ってもんは、血族の中でもっとも強くて、頼られるもんだろ？ 俺はもっと強くなりたいんだ。当主に相応しくなりたいんだ。それなのに、安全な場所で腐ってられるか！」

ついに数久が折れたのか、長いため息を一つ付くと、両手を顔の前に広げた。降参のポーズだ。

「でも、一人では行かないで」

「あ？」

まだ苛ついているのか、低い声で聞き返したゆずるに、もう一つため息を付いた。

「直ちゃんを連れて行つてね」

「へ？ 俺？」

「いない」

唐突に話を振られて慌てる直久だったが、気が付いた時にはすでに、ゆずるに拒絶された後だった。

話の流れの速さに付いていけない直久は、数久に救いを求める目を向けたが、説明の言葉を得ることはできなかった。数久はただニツコリとして、

「だーめ。直ちゃんを連れて行つてくれなきゃ行かせない」

と、ゆずるに言い放った。

「直が、何の役に立つんだよ」

「いざつて時に、盾になると思う」

「盾にいい？」

疑わしそうなゆずるの目を受けて直久は大声を上げる。

「俺は、人間盾にさえならないんかい！ つか、んなもんになりたくないし」

しかし、そんな直久の叫びをちゃんと聞いてくれる者は、一人としていなかった。

「ああ、あと、盾だけじゃなくて、他にも利用価値があると思うよ。例えば、直ちゃんがケガをすれば僕も同じとこに傷を負うみたいになれば、どんな危険な目にあっているのか、すぐに分かるし。万が一の時の目を覚まして欲しいって合図に、直ちゃんを殴ってくればいいわけだから」

「なんじゃそりゃあゝっ」

「なるほど……」

ポンつと手を打つゆずるの脇で、直久は畳の上にぶっ倒れた。その隙に、数久は直久の額に何やら文字を描いてしまう。

「はい、できた」

まるで頭に花一輪咲いているような笑顔で言ってくれる。

「直ちゃん、気を付けてね。直ちゃんがケガすると、僕も痛いんだ」

からね」

どうやら、何か術をかけられてしまったらしい。

もったいいや、好きにしてくれ。

そんな気分でのっそりと顔を上げると、目の前に手の平を突き出される。

「ん？」

見上げると、ゆずるの手だと分かった。おずおずと手を差し出すと、ゆずるの方から手を握ってきた。

「行くぞ」

短くそう言つと、ゆずるは莉恵の額にもう一方の手を置き、ゆっくりと瞼を閉じた。

ゆずるの澄んだ声が流れるように聞こえてきて、徐々にそれは小さく、小さくなって、やがて溶けるように聞こえなくなっていくた。

4・手、繋いどく？

手を繋ぎ合って眠っている二人を見て、数久は口元を緩めた。

近ごろは、前ほどひどくなくなったが、目が合っただけ戦闘開始してしまう二人だ。手を繋いでいるのも珍しければ、一緒に眠っている姿も貴重だった。

莉恵の額に右手を置き、左手は直久の手を取って、うつ伏せに眠るゆずる。そのすぐ脇に、右手は腹の上、左手はゆずるに握らせて、仰向けで眠る直久。

二人とも繋いだ手の方の肘を曲げていたので、二人の距離はごく短い。もう少しで向かい合った額と額がぶつかる距離だ。直久の黒々とした前髪と、それより少し茶色いゆずるの前髪が絡み合うように混じり合っている。

すうすうと、かすかに聞こえる寝息はどちらのものか、分からなかった。

「うわっ」

思わず声を上げてしまった数久は、慌てて己の口を両手で塞いだ。そして、カメラを持ってくるんだった、と激しく後悔する。だが、さすが直久の双子の片割れ。立ち直りが早い。

しっかりと目に焼き付けといて、後で念写しちゃおう。

そう心の中だけではしゃぐと、一人笑った。

人の気配を感じて振り向くと、障子に映る小さい影を見つけた。

数久が、優香のものだと気付いたのとはほぼ同時に、静に声が響いた。

「ゆずる兄さま？」

「優香ちゃん、入っておいで」

「……はい」

予想外の相手が答えたことへの動揺を滲ませた返事が聞こえ、ゆつくりと障子が開いた。

廊下にちょこんと正座した優香を見て、数久は微笑む。

手招きをしてやると、すくっと立ち上がり、部屋の中に移動し、再び正座をして障子を閉めた。

「言い付け通り、鈴加姉さまにお願いしてきました」

「ありがとうございます」

労うようにニコツと笑うと、優香も緊張が解けたようにホッと息を付き、笑顔を見せた。

ゆずるが優香をお使いにやっていたのだ。

大した用ではなかったが、尊敬する兄直々の言い付けだったので、優香は気を張りつめていたらしい。

「鈴加さんは何て言ってた？」

「最初は、絶対無理！って。だけど、貴樹兄さまが自分も一緒にやるからって、説得してくれて」

「さすが、貴樹さん！」

姉の鈴加には、莉恵の家に集まってしまった魔物の駆除をお願いしたのだが、何分あの量である。姉には荷が重すぎると心配していたのだ。

ただでさえ、あんまり当てにならない人なのに。

力が弱いとか、頼りないとか、そういうことで当てにならないのではなく、力の使い方的大幅に間違っている人なので、当てにならないのである。……と言うより、あまり当てにたくない人である。

例えるのなら、蟻一匹倒すのにミサイル5、6発投下させるような力の使い方をする。

幼いころ、何度殺されかけたことが……。

真夏の夜、蚊がうるさくて眠れないと言った彼女は、怒りに任せて屋根を数百メートル上空に吹き飛ばしたことがある。彼女が6つの時だ。

当時、2歳だった双子たちは、その爆風により、屋根と共に天高く吹っ飛び、約4時間後、直久は数キロ先の河原で、数久は本家の裏にそびえる山の奥で発見された。

要するに、力の加減ができない人なのである。魔物を抜うついでに、家そのものも払い飛ばしかねない。

数久の胸に不安がよぎる。

もしくは、最初の一匹にいらぬ全力をつぎ込み、残りの魔物を倒す余力無く、力尽きちゃったりして。

姉を不安がるのは、何も数久だけではなく、両親も祖父母も同じ思いで、そんな姉には幼い頃からお目付役を付けられていた。貴樹がそれだ。

貴樹は、鈴加たちの父親の妹の息子で、鈴加にとって、従兄だ。ちなみに、愛羅の兄でもある。

二人の年が同じだったことから、自然に、鈴加のお守りは貴樹、という風になってしまったと聞く。

今では、貴樹は、鈴加の実の親より、鈴加の扱いがうまいと評判だ。

あまり、と言うより、全くうれしくない、と彼は肩をすくめるが、まんざらでもない様子が見て取れた。

「貴樹さんが一緒なら、きっと大丈夫だね」

優香に微笑みかけながら、自分自身に言い聞かせるように、数久は言った。そんな数久を励ますように優香も頷き、そして、ゆずるの方に目を向ける。

「ゆずる兄さま、どうなされたの？」

「莉恵ちゃん、夢の中にお邪魔させてもらっているんだよ。夢の中の莉恵ちゃんに会って、もう起きなさいって言うんだ」

「そうしたら、りえちゃんは起きてくれるの？」

「そうだよ」

ホッとした息を吐いた優香を、数久は目を細めて見つめる。そうしてから、刻々と眠る二人に目を移動させた。

今、自分が言ったように簡単に事が進むと良いのだけど……。数久は優香に気付かれないように、そっとため息をついた。

キイイン、と耳鳴りがして、直久は我に返る。薄く目を開けると、驚くほどの至近距離にゆずるの顔があった。

自分とは違い、太陽の下で元気に運動！……なあってことをしない肌は白く、黒子一つ見あたらない。

長い睫毛が目の下に影を落としている。

繋がった手に目を移した。それに続く手首が、ゆずると自分のでは、えらく太さが違うのだと気付いた。

一回りほどゆずるの方が細い。力を込めたら、簡単に折れてしまいそうだった。

こいつ、ちゃんと肉食ってんのかなあ？

一緒に暮らす相手が70過ぎのじじいとはばあでは、洋食ものはまずテーブルに出てこないだろう。

ゆずるが、ハンバーガーを食べたことがないと言って直久を驚かせたのは、つい先日のことだ。

よくよく聞けば、ハンバーガーだけじゃなく、ラーメンやパスタ、お好み焼き、たこ焼きなどといったものも、口にすることがないらしい。

ある意味、すごい奴だよ。

そう、感心したのを覚えている。ゆずるの瞼がゆっくりと開いた。

何か言いたそうな表情をしたが、開きかけた口を閉じ、しばらくして再び口を開いた。

「何、見てんだよ？」

不機嫌そうな口調は、どうやら照れ隠しらしい。

「うんにゃ、見てたっけ、体が動かないんだけど」

「あ」

そつかと小さく声を上げると、ゆずるは繋いでいた手を離れた。

とたん、直久の体が自由になる。

直久はむくりと起きあがり、辺りを見回した。そこは、何処かで見覚えのある場所だった。

一面に敷き詰められた緑のタイル。高さは低いが、広い机。その机は6つあって、3つで2列をつくっていた。1つの机ごとに4つの椅子があり、その椅子もまた低く、小さい。

部屋の隅にはオルガンが置いてあり、壁にはとても上手とは言えないような絵が何枚も貼ってあった。

「なんだ、ここ？」

「幼稚園だ」

「幼稚園？」

「優香たちが通っている幼稚園。俺たちも通っただろ？」

「あー、そう言えば……」

8年ほど前の記憶をたぐり寄せて、直久は頷く。立ち上がり、もう一度ゆっくりと教室の中を見回す。

近付いて、手で触れていくと、何だか懐かしさが溢れてきた。

「直久。あんまりフラフラすんな」

「あ？」

「夢の中は、空間がすっかり保たれていない。数十センチの距離が一瞬で数キロの距離になってしまうこともある」

もし、そうなくても自分には夢から現実に戻って来られる自信があるが、直久には無理だろう。

そう、ゆずるは仄めかず。

確かにその通りで、自力で夢から脱出することができない直久は、ゆずるとはぐれてしまったら莉恵の夢の中に閉じ込められてしまうだろう。

急に不安になって、ゆずるを振り返った。

「手、繋いどく？」

「い・や・だ」

「えー。俺、ぜえったい迷子になっちゃうよ」

直久はゆずるのもとに大股で戻ってきて、まだ床に座り込んでいたゆずるに手を差し出した。

「ほおら」

「……」

「手、繋ごう」

自分の可愛らしく、小首を傾げて言ってみた。すると、大げさなため息が聞こえて、握り返される。

直久はその手を引き上げて、ゆずるを立ち上がらせると、ニッと笑って見せた。

「……気持ち悪い」

「ひどー。そういうこと言うと、直ちゃん、傷付いちゃうんだからねっ」

「うるさい」

うんざりした顔で短く言い捨てると、直久の手を引いて、ゆずるは歩き出す。

早いとこ莉恵を探し出して、帰りたいかった。直久と二人きりという状況はゆずるを疲労させるし、何より、夢魔の存在が危険だ。

ゆずるは教室の扉を開けた。引き戸であるそれを横にスライドさせると、外の景色が二人の前に姿を露わになる。

最初に見えたのはジャングルジム。続いて、ゾウさん型のすべり台。ブランコ、鉄棒、砂場、と、記憶にある幼稚園の運動場が目映った。

隣でホッと息を付いたゆずるの顔を、直久は不思議そうに見る。

その視線に気付いて、ゆずるが振り返った。

「夢の中の空間はおかしいって言ったろ？　あるべき所にあるべき物がないっていうのはよくあることだし、こんな場所にこんな物があるはずないのにあるっていうのも、よくあることだ」

「つまり、教室のドアを開けたら、運動場じゃなくて砂漠が広がっていたかもしれないわけか？」

「砂漠だか、草原だか、それは何か分からないけどな」

とにかく、現実世界とは、かつてが違う。気を引き締めなければと、ゆずるは咽を鳴らした。

「式神を呼ぶ」

「呼ぶ？ 式神って呼ぶもん？」

式神を使っている様子を実際目にしたのは、数久が使っている時、一回のみだ。

あの時、数久は印というものを結んで、全身から蒼いオーラのよなものを放出し、それが次第に大蛇の形を取ったのだ。

数久の式神は『雲居』と言って、大蛇の妖怪だ。

人型を取ると、超が百万個付く美女なんだよ……と数久は背景をピンク色に染めて言うが、それはあながち嘘じゃない。

自分の目で真実を確認した直久も、どことなく悔しいものがあるが、頷いてやつてもいいと思っている。

それはともかく。数久が雲居をよぶ時、『呼ぶ』と言うより、『喚ぶ』だったのを覚えている。

直久の考えを読んで、ゆずるはなるべく丁寧に説明しようと、眉を寄せる。

以前の直久なら、説明する気にはならなかっただろうが、ここ最近の彼は少しでも九堂家について知ろうと必死になっているのを、ゆずるはちゃんと分かっていたのだ。

「式神の所有仕方は人によって違う。数久の場合、体内に入れておく。体内と言っても、心臓とか、肺とか、胃とか、どことはつきり言える場所じゃなくて、全身を取り巻く『気』みたいなものに混ざり合わせておくんだ」

「気？ オーラみたいなもんか？」

「まあ、そんなとこかな」

「じゃあ、体内つーより、体の表面にまわり付かせているカンジ？」

「……そうだな。この所有の仕方をしている者が式神を喚ぶ時、気を普段の倍以上に体内から放出する。それを餌にして、式神は元々

の姿を取り戻し、姿を見せるというわけだ」

要するに、使わない時はコンパクトサイズで数の回りを取り巻いているものが、使われるって時になると、数の気食って『ふえるワカメ』みたく体を膨らませ、大蛇の姿になるってわけだな。

「なんか、それって疲れない？ 喚ぶ度に気を食われるわけだろ？」

「それだけじゃない。実は数久のやり方は一番力を消耗するやり方なんだ。他にも石とか、物体に式神を封じて所有するやり方もある。これも喚ぶ時には大量の気が必要だが、物体に封じている時の式神は眠っているわけから、本当に喚ぶ時だけ力を消耗する。対して、体内に式神を入れておくのは、霊に憑かれているのと近い状態にある。式神は主と寝起きを共にする。常に眠った状態にある場合と違って、定期的に食事が必要となる。奴らの食料は人の生気なわけだから、食事の時間の度に、数は式神に気を与えなければならない」

「なんで、数はそんな疲れる方法を取ってるんだ？」

石とかに封じちゃえばいいのに。

そりゃあ、その石を忘れちゃったりしたら大変だけどさ。……俺

なんかは忘れちゃいそうだけど、数なら大丈夫だろうし。

首を傾げた直久に、ゆずるは続けて話した。

「それに体内に入れるやり方よりも、物体に封じて持ち歩いた方が複数の式神を所有できる。だから、物体に封じるやり方を取っている者が多い。お前の姉さんもそうだろ？」

「鈴加も？」

そう言えば、怒った鈴加にビー玉を投げつけられたことがある。

そのビー玉は直久の頭に当たるや否や、突然、発火したのだ。

近くにいた貴樹が慌ててカードのような物を放ったら、そこから大量の水が出てきて直久は焼け死ぬことを免れたわけだが、みつともなく焦げた髪を母親に剃られて、しばらく屈辱の坊主頭になってしまったのを覚えている。

「つーことは、貴樹もそうなんだ」

カードに封じるなんて、なんかのゲームみたいで格好いいジャン！
「……で、数のことなんだけど」

ゆずるはどう言って良いものかと、目を空に泳がせた。そして、心なしか声を低めて言う。

「数の式神って、大蛇だろ。雌の……。蛇の女って、嫉妬深いんだよ。だから、数は大蛇一匹しか式神に持てないんだ」

「マジでえ？」

「しかも、その大蛇が、自分を物になんかに封じたら許さない、って言ったらしい」

「怖っ！　なんで数はよりによってそんなおっかないのを式神にしてんだ？」

「俺たちは7歳で、初めの式神を持つ。本家の裏に山があるだろう？　あの山は九堂家の所有物なんだけど、いっさい人の手を加えず、妖怪の溜まり場にして、放置しているんだ。7歳になると、一人でその山に入らなければならない。そこで最初に出会った妖怪と契約するんだ」

「契約？」

「それと見合うものを与える代わりに、自分の式神になれと」

「つまり、数が最初に出会った妖怪が雲居で、雲居とその契約したんだな？」

「そう。要するに、あいつは運が悪かったんだ」

確かに運が悪かったのかも知れない。だが、数は自分の式神が雲居であることに何の不満もないようだった。

「数のような式神の所有仕方にも利点があって、常に餌を与え続けているわけだから、その分成長するんだ」

「強くなるってことか？」

「そういうこと」

「育成ゲームみたいだな」

それで？　と直久はゆずるに振り返った。

「お前は？　どういうやり方してんだ？」

「俺の場合は……。俺の式神たちは普段、俺とは全く別の場所にいるんだ。九堂家当主が所有する式神は、その昔、小夜が所有していた式神と同じもので、あいつらは小夜ただ一人に服従している。代々の当主があいつらの主になれるのは、小夜が自分の子孫に使えるようにと命令を下したからにすぎない。だから、あいつらは他の式神のように主に絶対服従しない。あいつらはあいつらのプライドを持つて生きているんだ」

「確か妖狼だったっけ？」

「そう、9匹の妖狼。九堂家の当主は8匹の妖狼を式神に持つて初めて当主と認められる。次代はその準備期間だ。俺はまだ5匹しか持てていない。あと3匹、自分のものにできれば……」

「ちよつと待て。9匹じゃないのか？」

直久はゆずるの声を遮つて、疑問を口にする。ゆずるは眉をひそめた。

「9匹いるうちの8匹でいいんだ。残りの1匹は、例えば小夜の命令だとしても小夜以外の主を持つ気がない。式神にはならないから」

「なんだそれ？」

「朝霧つていうんだけど、小夜が死んだとほぼ同時に、誰とも何とも関わりになりたくない、眠りについてしまったんだ」

「そういうヤツもいるんだなあ」

妖怪と言えども、人間並みに個性豊からしい。感心している直久は横目にゆずるは続けた。

「俺の式神たちが普段どこにいるかと言うと、大伴家が守っている神社だよ。俺が一番扱い慣れているヤツで、先見つていうのがある」

「さきみ？　先見つて……」

「そう、お前んちの神社にいるんだ。あいつのことだから、俺が呼ばない時間は、社の中で転がっているんじゃないのか？　屋根の上で昼寝しているかもしれないけど。あと、供物の酒を煽っているか

も。あいつザルだから」

そう言えば……と、直久は記憶を探る。

屋根の上を走り回る音が聞こえたり、社の中が散乱していたりすることが偶にある。その度に母親が見えない誰かに小言を言っていた。

「俺が式神を呼ぶと言ったのは、まさに呼ぶからだ。俺の声はどんなに離れた場所でもあいつらに届くから、ただ呼ぶだけでいいんだ。そうすれば、あいつらは駆けつけて来てくれる」

けど、と、ゆずるは小さく呟くように続けた。

「俺の式神であるのと同時に現当主であるお祖父様の式神でもある。二人同時に命令を下せば、あいつらはあいつらのやりたい方を実行する。それに、あいつらの一番優先する主は小夜なわけだから、俺の命令に従わないこともあるんだ」

なんだか知らないけど、ゆずるはゆずるで大変らしい。数のように一匹だけど、絶対服従してくれるって方が分かりやすいし、よほど扱い安いんじゃないかと思う。

「次代様っていうのも大変なんだな」

力が無くて嫌な思いを散々してきた直久にとって、次代だと崇められているゆずるは、自分にとって対極に位置する存在だった。

自分が欲しいと思っているものを全て持っていて、同じ年なのに回りの大人たちから対等の大人として扱われて……。

そうか、と直久はゆずるの顔を見つめた。俺ってば、こいつのことが羨ましかったのかも。

こいつの周りばっか光が集まっているように見えて、自分は暗闇にるように思えた。

両親はもちろん、鈴加もゆずるのことを一目置いていて、数でさえ、ゆずるの言いなりだ。

嫌いだ、嫌いだ、と思い続けていたのは、こいつが羨ましかったから？

今は、前ほど嫌いじゃない。苦手意識もいつ頃からか、消えてい

た。

怖いもの見たさ。

絶対、見た後で後悔すると分かっているけど、車にひかれた猫の死骸を見てしまう。

そんな気持ちと同じ気持ちで、ゆずることが知りたかった。初めは、たぶん、そうだった。

嫌いだけど、知りたい。もっとよく知っていたい。

満月の夜、震えているあいつを見てしまったから、あの時から、直久の中のゆずるは無視できる存在ではなくなってしまったのだ。

自分とは全く異なる場所で苦悩しているゆずるに直久は柔らかに笑った。すると、ゆずるも肩をすくめて笑い返してきた。そうして、言い放つ。

「あんまり、知ったふうにな」

口調は怒っているようなのに、照れているからそんな言い方をするのだと分かっている。ええ、どんなひどい言葉でも可愛い。

だんだんこいつのことが分かってきたぞ、と直久は一人ほくそ笑んだ。

5・ちよつと待て、余計わかんねー

ゆずるは、くいつと顎を上げて瞳に空を映すと、己の式神を呼んだ。

「先見、風通い、来い！」

そんなんでやって来るわけだから、簡単なものである。グラリと空間が歪んだ。ふわりと風が吹く。と、同時に酒の臭いが辺りに漂う。

直久には見えない相手に、ゆずるは眉をひそめた。

「先見。お前、また飲んでいたな」

先見と呼ばれる式神と会話をしているらしく、ゆずるは間をあけて言葉を発した。

「うるさい」

直久は一人のけ者にされた気分で、面白くなかった。

「何話てんだ？」

「お前には関係ない！」

ちよつと聞いたただけなのに、ゆずるは顔を赤くして怒鳴った。

なんだよ、すっげえー気になるじゃんか。

ぶすつとした顔を見ると、思い直したのか、ゆずるは何もない空間を指差して、この辺りに先見が、その辺に風通いがあると説明してくれた。が、全く見えない。

どんな奴らなんだろう？ やっぱり人型をしているのかな？

「俺が最初に式神にしたのは刀守りなんだけど、先見が一番扱い安いんだ。先見は少しだけ未来を知ることができる。8匹の式神の間でも相性つてものがあって、先見と相性がいいのは風通いだ。風通いは風を操る。先見と二人揃えば、敵に対する先制攻撃が取れる」

「なんつーか、むちゃくちゃRPGみたいだよな」

「RPG？」

「ゲーム」

妖怪、魔物といった類に弱い直久に対して、ゆずるは俗物弱かった。

それを俗物と言って良いのか分からないが、世間のお子さまたちが普通に知っているようなことを知らないゆずるなのだ。

「で、何て話してたんだ？」

「迷い土はお祖父様の命令で動いているから、こちらには来られないって」

迷い土っていうのもゆずるの式神の一人なんだろうけど、さっき話していた内容はそれと違っただろう。直久は直感する。

そんぐらいの内容で顔が赤くなるわけがない！

だが、それ以上詮索するようなことはしなかった。ここでゆずるを怒らせても仕方がない。

直久はゆずるが式神に命令を下す様子を見守った。

「6歳の子どもがいるはずなんだ。探して欲しい。見つけしだい俺のところに戻ってこい。いいな」

再び風が吹いて、酒の臭いが遠ざかっていく。去っていく彼らを見送るように、遠くを見つめていたゆずるが、不意に振りかえった。
「俺たちも探そう」

そう言って、直久の手を引き、ゆずるは歩き出した。直久は低く答えてそれに従う。

どこからだろうか？

桜の花びらが直久の目の前までやって来て、ひらりと舞った。数歩先を歩くゆずると直久の間をひらりひらり舞う。それにゆずるは全く気が付いていないようだ。

だが、直久には、まるで、その花びらが二人を引き裂こうとして、直久を惑わしているかのように見えた。

直久はゆずるの手を握る力を強めた。驚いて、ゆずるが振りかえる。

「何だよ？」

「え？……あ、いや」

何だよ、と聞かれて答える言葉が無く、直久は狼狽える。急に繋がった手が恥ずかしくなった。

妙に熱い。怪訝そうな顔をするゆずるに何か言わなくてはと焦って、直久は口を開いた。

「お前、他にどんな式神を持っているんだ？」

「他？」

ゆずるの眉がひそめられる。だが、すぐに答えをくれた。

「俺の式神は、刀守り、先見、風通い、迷い土、火刈り。刀守りと迷い土は雌狼で、刀守りの方が気性は穏やかだな。幼い次代を守る役目にあるんだ。だけど、彼女の一番重要な役目は、神剣を保管することだ」

「神剣？」

会話が始まったことにホツとして、直久は聞き返した。

「儀式の時に当主が使う刀。見た事……ないか。お前、ほとんど行事に参加しないもんな」

「悪かったな」

ふて腐れた顔をした直久に少し笑い、ゆずるは直久の手を引いて再び歩き出した。

廊下はやたら長かった。とても幼稚園の廊下とは思えない。静まりかえった辺りにゆずるの声が響いた。

「迷い土は、数の雲居と張るくらい美人な奴だ。けど、何を考えているのか、未だに、俺には分からない。」

式神は主を主だと認めて式神になってくれるものだけど、俺は迷い土に俺のどこら辺を主だと認めて貰ったのか、分からない」

「何だ、そりゃあ？」

「さあ」

ゆずるの肩がわずかに上がった。ため息が漏れ聞こえた。

「迷い土は、地の力を使ったり、敵からの攻撃から守ってくれたりしてくれる。他にも、敵を惑わしたり、傷を治してくれたり……。」

先見のことはいいだろ？ さっき言ったから。風通いは風を操る。

先見とも相性が良いけど、火刈りとも良くつて、3人そろえば、どうしようも手に負えない漫才トリオだ。ただ、二人は先見ほど気安くなくて、特に火刈りはプライド高く、扱い難い」

ようやく次の教室の前に着いて、ゆずるはドアを開ける。

薄暗い、誰もいない教室。そう簡単に見つかるわけがないと、ゆずるはドアを閉めて、足を先に進めた。

「だから、火刈りは、月齢26から6の間しか使うことができないんだ」

「月齢？」

「新月を0と数えた日数のことだ。満月はだいたい15で、29まで数えると、0に戻る」

「いまいち分かんねえーんだけど？」

「新月というのは、太陽と地球の間に月が入った状態で、その3つが直線上にあり、地球から月がまったく見えない時のこと。この時の月齢は0。それから約一週間で、上弦の月になる。上弦の月っていうのは、太陽から90度東に月が移動し、地球から半分だけ見える月のこと。この時の月齢は7.4前後。それで……」

「ちよつと待て、余計わかんねー」

突然始まった天体授業に直久は両手を上げた。途中で言葉を遮られて、ゆずるは不快そうに顔をしかめた。

「聞いたのはお前だ。最後まで聞けよ」

「つーか、その月齢とお前が式神を呼ぶのが、どう関係あんの？」

「それは」

直久の問いにゆずるは言葉を詰まらせた。気のせいか、ゆずるの顔がほんのりと赤い。

「それは、ほら、俺って、月に一度力を失うだろ？」

「ああ」

そうなのだ。ゆずるは九堂家の御曹司にふさわしい強大な力を持っているが、それは不安定なもので、

月に一度、まったく失ってしまう時があるのだ。

力を失ったゆずるが必死になって直久にしがみついていた時があった。その時を思い出して、直久は頷いた。

「あれって、月の満ち欠けに関係しているんだ。満月に完全に力を失って、逆に新月の時は絶対調みたいに。満月に近付けばそれだけ弱まり、新月に近付けば強まる」

「で、今日はどのくらいなんだ？」

「5・6くらいかな」

「ぎりぎりってどこか？」

さつき火刈りを使えると言っていた月齢を思い出して言うと、ゆずるも頷く。

「ああ、そうだな。俺が好調だと感じる期間は、月齢26から6だから」

「なあ、ところで、なんで29で、0に戻るんだ？」

「それは、月が地球の回りを一周するのにほぼ一ヶ月、正確に言えば29・5日かかるからだ。ほら、旧暦は29日か30日までしかないだろ？」

「そうなのか？」

即、聞き返した直久にゆずるは目眩を感じて額を抑えた。

「そうなんだよ。ちなみにお前のおつむが良くなるように言えば、月齢にプラス1をした整数部分が旧暦の日付とほぼ一致するんだ」

「へー」

そんなことを聞いたくらいで直久の頭が良くなったとは、とても思えない。軽い返事すると、ゆずるはおおげさにため息をついた。

「要するに、カレンダーの日付が30日から1日にもどるように、月齢も29で0に戻るんだ。もっとも正確に言えば、29じゃなくて、29・いくつ……なんだけどな」

そう言って、ゆずるは足を止めた。次の教室の前まで来たのだ。ゆずるはドアに伸ばした手を、その途中でピタリと止めた。

「ん？ どうした？」

「何かいる」

「何かつて？」

ゆずるの顔から、莉恵じゃないことは伺えた。すると、夢魔なのだろうか。

「逃げよう。やばいって」

だが、直久の制止も聞かず、ゆずるはドアをスライドさせた。ガラリ。軽い音が辺りに響いた。

二人の目に薄暗い教室が映る。先程同様の薄暗い教室。だが、今回の教室には誰かがいる。

いや、誰かがではない。教室の椅子、一つ一つに何かが座っていたのだ。

子どものようなソレは、きちんと椅子に座って、皆同一方向を見つめていた。

ソレは、優香や莉恵が、8年ほど以前はゆずるも直久も着ていた浅黄色の制服を着、黄色い帽子を被っている。

「な、なんだ？」

「人形……」

その一体に近寄って見てみると、縫い合わせた布に綿を詰めた簡単な作りの人形であることが分かった。

帽子からはみ出した髪の毛は毛糸で、目玉は大きな黒いボタン。鼻は無く、口は逆三角形の赤いフェルトだ。制服はまるで、てるてる坊主みたいに顎の下から縫いつけられていた。首がないのだ。

ズボンやスカートも履いていないようだ。浅黄色の生地から、白く、丸みのある足が覗いていた。腕も棒のようで、制服に縫いつけてある。指は無かった。

「なんだ、これ？」

直久に、さあ、と肩をすくめてゆずるは教室から出た。引きずられるようにして直久も外に出ると、ゆずるはドアを閉めた。

「一つの場合に長居は無用だ。次に行くぞ」

そう言って、ゆずるは歩き出す。

しばらくして、次の教室にたどり着いた。そこでもゆずるはドアを開けることに一瞬躊躇する。

また何かいるらしいと、直久も気を引き締めて目を見張った。ドアを開けると、やはり中は薄暗く、ぼんやりと子どもの影が見えた。

すぐにそれが人形であることに気付くと、直久はそのうちの一体を覗き込んだ。

人形は人形だが、先程の人形よりも人間らしく作られている。フランス人形のように、肌はゴムで、髪の毛も一本一本が糸のようなものでできていた。

目も傾けると瞼が閉じるようになっていて、鼻もあるし、薄く開いた口もそれらしく作られていた。

やはり制服を着ているのだが、

今度は、男の子はズボン、女の子はスカートを履いていて、表情もそれぞれ異なっている。

人形は皆同一方向を向いており、その視線を追いかけるようにそちらを振り向くと、オルガンが置いてあった。

オルガンの前に何かが座っていて、それも人形だとすぐに気付く。大人の人間形で、女性だった。

クリーム色の洋服に桃色のエプロンをしている。その人形に近付こうとすると、それを止めるようにゆずるが手を引いた。

「行こう」

「……ああ」

どうやらゆずるは異常なしと判断したらしい。直久の手を引いて教室から出ると、静にドアを閉めた。

再び長い廊下を歩き出す。

しばらく歩いて、次の教室にたどり着いた。やはりそこでもゆずるはドアを開ける前に息を呑んだ。

その様子に一瞬緊張を走らせた直久だったが、どうせまた人形だろうと、すぐに肩の力を抜いて、ゆずるがドアを開けるのを見守っ

た。

薄暗い教室。ぼんやりと浮かぶ子どもたちの姿。

さっきの教室の人形よりもまた造りが精巧になっていた。

頬を指で押せば柔らかくへこみ、ぷよんと揺れて元の形に戻る。

髪もミシン糸よりも細いものでできていた。目はガラス玉などではなく、潤みを持ったもつと別の何かで、鼻も奥まで穴があいていた。

歌うように開かれた口の中には歯や舌があり、今にも動き出し、そこから声が聞こえてきそうだ。

「気味が悪い」

ポツンと呟いたゆずるに直久も頷きながら、人形たちが見つめる先を目で追った。

そこにはオルガンが置いてあった。オルガンの前には、やはり何かが座っていて、それもすぐに人形だと分かる。またかと思いながらも目をこらえると、その人形はさっきの教室の人形とは異なり、奇妙な格好をしているのに気付いた。

先が二股になったとんがり帽子。赤や青、黄色など様々な色の布地を継ぎ合わせたダボダボの洋服。

もう少しよく見てやろうと、直久はそれに歩み寄った。

異様に白い顔。赤く丸い鼻。唇は青く、目の回りは黒く十字に塗られていた。

「ピエロ？」

「……みたいだな」

次の教室に行こうと、ゆずるが手を引いたので、直久はピエロの人形から目を逸らした。その時。

ポーン。

オルガンの音が聞こえて二人は同時に振り返った。ピエロの両手がオルガンの鍵盤の上に置かれている。

う、動いた？ 人形が？！

そんな疑問を感じている暇なく、二人の目の前で白い両手が動き出した。滑らかに鍵盤の上を滑っていく。

聞こえてきた曲は、ピアノなど習ったことのない直久でも弾ける
『ねこふんじやった』だった。

それは、始めはゆっくり、しだいに聞き取れないほど早くなっていく。

ゆずるは直久の手を引き、ピエロから目を逸らさないようにして
徐々には出口の方に足を運んだ。

つうつと、頬を汗が伝う。

「なんだ？ いったい」

「しっ、口を開くな」

ゆずるの様子から危険を感じ取って、直久は大人しくゆずるに従った。一度早くなった曲がまたゆっくりとなっていく。

歌えるほどゆっくりになったところで、子どもの人形が一斉に歌い出した。

『ねこふんじやった　ねこふんじやった
ねこふんづけちゃった　ひっかいた
ねこひっかいた　ねこひっかいた
ねこびっくりして　ひっかいた』

わるいねこめ　つめをきれ
やねからおりて　ひげをそれ

ねこ　ニヤーゴ　ニヤーゴ　ねこかぶり
ねこなでこえ　あまえてる

ねこごめんなさい　ねこごめんなさい
ねこおどかしちゃって　ごめんなさい
ねこよつといで　ねこよつといで
ねこかつぶしやるから　よつといで』

これって、こんな歌だっけ？

そういえば、弾いたことはあるけど、歌ったことはないなあ。

直久が首を傾げると、ゆずるは強く手を引いた。振りかえると、あれを見ると目で人形たちを指す。

そちらを振り向いた直久は、思わず息を呑んだ。子どもの人形が歌いながら、二人の方にゆつくりと歩み寄ってきているではないか。動きが鈍いから余計に、両手を伸ばして近寄ってくる様子は、いつかやったゲームのゾンビみたいだ。

『ねこふんじやった　ねこふんじやった
ねこふんづけちゃった　とんでった
ねこふんじやった　ねこふんじやった
ねこおそらへとんじやった』

あおいそらに　かささして　ふわり　ふわり　くものうえ
ゴロニヤーゴ　ニヤーゴ　ないている
ゴロニヤーゴ　みんな　とおめがね

ねこふんじやった　ねこふんじやった
ねこすつとんじやって　もうみえない
ねこグッバイバイ　ねこグッバイバイ
ねこあしたのあさ　おりといで』

歌が終わった時には手が届く距離で、二人の服を掴もうとする。

一人の手を振り払う間に、3人の手を伸び、それに気を取られている間に背後の人形にベッタリと抱き付かれた。

一人にそれを許せば、あとは団子のように、後から後からくっついてきて、直久もゆずるも身動きが取れなくなった。

膝の裏を蹴られて、ガクリと床に倒れれば、背中に乗り上げられ、頭を押さえつけられる。

両腕それぞれに二体の人形がぶら下がり、首からぶら下がるもの、

腰の辺りに腕を回してくるもの……と、苦しいほどに引っ付いてくる。

咽元に手がかかった時、我慢の限界を感じて、直久は腕を力一杯に振り上げた。

人形とはいえ、子どもの姿をしているせいで、どこか抑えていたところがあつたのだ。これ以上の我慢はできなかった。

腕にぶら下がっていた人形が手を離し、尻餅を着いた隙に直久の首を絞めようとしていた人形を掴み、直久はそれを片手で遠くに投げ飛ばした。続いて、背中へばり付いている人形に手を伸ばす。

それも投げ飛ばすと、直久は立ち上がった。

その間、ずっと手を繋いだままにしていたゆずるの救助に向う。

同じように人形に押し倒され、もみくちゃになっているゆずるを手を引いて立ち上がらせながら、それを邪魔しようとする人形を蹴り飛ばしていく。

人形はコンマ数秒間空を舞い、近くの壁に叩き付けられて床に転がった。

腕や足が折れたり、頭が割れ、中からどす黒い液を垂れ流すものもいたが、痛みを感じない体は何度でも起きあがり、二人の方に手を伸ばしてくる。

「くそっ」

きりがない。

オルガンを弾き続けるピエロに目を向ける。人形を操っているのは、あのピエロに違いなかった。

そう思った時、不意にピエロが直久の方に振り向いた。にやりと青く塗られた唇が横に引かれた。

直久はその笑みに、自分の考えの正しさを知った。

あの、あのピエロを何とかすれば……。

「直久、だめだ」

ピエロに飛びかかろうとしていた直久をゆずるが止める。

「なんで？」

「お前には無理だ。勝てない」

ゆずるは直久を見ずに、静かに、静かに、言葉を一つずつ噛み締めるように言い放った。

「あいつが、夢魔だ」

6・もしかして、お前、高所恐怖症？

「……夢魔？」

えっ。つーことは、もしかして、まずくねえ？

ゆずるにさえ手に負えない相手だって言っただけだったわけ？

んで、鉢合わせしないようにしようって、言っただけよなあ？ 思

いつ切りしちゃってんじゃないか！

どうするんだよ？という目をゆずるに向けて、あたあたしている

直久を、嘲るようにピエロは立ち上がり、ゆったりとお辞儀をした。

「はじめまして、僕はパノンっていうんだ。君たちは？」

背丈は直久と同じくらいか、もう少し高いかだ。

少年のような声だが、年齢は分厚い化粧に隠されて、よく分からない。

パノンというのは、おそらく彼の名前なのだろう。……だとし

たら、君たちは？という問いは、自分たちの名前を聞いていることになる。

だが、素直にそれを教えていいものか戸惑っていると、パノンは、童話とかの挿絵の妖精が履いているような、つま先が天上に向けた靴を、トントんと踏みならした。

「本当は、ちゃんと知っているんだ。九堂家のお坊ちゃんだ。君に会いたくて、この夢の中で待っていたんだよ」

隣でゆずるが息を呑む。

「君の肉を喰らうと、強くなれるってホント？ 試してみたい？」

ニヤリと笑った歯が黄色い。牙のようなものが見えた。

繋がった手からゆずるの震えが直久のもとに届き、直久は背中でゆずるを庇うように立った。

直久の太股に激痛が走った。何事かと目線を下ろすと、人形が直

久の左足に鉛筆を突き立てていた。

「痛い？」

直久と目が合うと、その人形は無邪気に笑って言った。

「ねえ、痛い？」

振り払おうとして、はつとする。人形は自分の幼い時にそっくりな顔をしていた。

ケラケラ笑って、直久の足から鉛筆を引き抜くと、今度は右足に突き立てようと腕を振り上げた。

だが、いつまでも大人しくやられたままになっている直久ではない。突き立てられる前にその腕を掴んで、人形の体を遠くに放り投げる。

ゴッソ。

鈍い音をたてて人形は床に転がった。それを見て、パノンは信じられないと、声を上げる。

「ひどいなあ」。僕のおともだちをいじめないでよ。意地悪する子はお仕置きだよ」

そう言って、どこからともなく取り出した物を高々と振り上げた。斧だった。片手で持てるほどの小さな物だったが、紛れもなく斧だ。

直久はゆずるを胸に抱いて、横に飛んだ。

床に倒れてから、斧の行方を確認すると、一瞬前まで自分たちが立っていた場所の後ろの壁に深々と突き刺さっていた。

壁には大きく亀裂が走り、刃のほとんどが埋まっている。

もしも避けずに当たっていたら、ケガしちゃった、てへ………この騒ぎじゃない！

胸が真つ二つになるところだった。

パノンは避けられたことに顔をしかめ、

「どうして避けるの？ だめじゃないか」

と、もう一本斧を取り出す。まさか、それも投げるんじゃないか……。

直久の嫌な予感の的中し、斧がパノンの手から離れる瞬間、直久

は再びゆずるを抱えて、床を転がった。
ドスッ。

堅いタイルの床に斧が突き刺さる。

「次は2本いつぺんだよ」

おもしろがっている声が聞こえて振りかえると、パノンが両手に斧を掲げている。

「ゆずるっ」

なんとかしろっと思ふは訴えた。

いくら反射神経と体力に自信があると言っても、百発百中で避けられる自信はないし、無限の体力を持っているわけでもない。

直久の呼びかけにゆずるは頷いて、パノンの方に両手を広げる。

「火刈り、お前の炎を貸してくれ！」

そう、ゆずるが声を張り上げると、その両手から炎が放たれる。

人間3人が向かい合って手を繋ぎ、できる限りの大きな輪を作ったくらいの大きさの青い炎だ。

「直久、今のうちに」

炎がパノンを襲っている間に逃げようと、ゆずるが直久の手を引いた。

言われなくともそうするつもりだと直久は頷いて、教室のドアを開けた。そして、目の前に広がった外の景色に啞然とする。

「なんで？」

そこは幼稚園の運動所などではなかった。もっと記憶に新しい、小学校の校庭だったのだ。

「なんで……」

「言っただろ？ 夢なんだから、こういうこともあるんだって」

気にする様子もなく、ゆずるは校庭に降り立った。数百メートル先に校舎が見えた。

二人が6年間通った懐かしさ溢れる小学校の校舎だ。

「一日の大半を過ごす幼稚園と、入学するのを心待ちにしていた小学校。どちらも莉恵ちゃんの夢の舞台になってもおかしくない場所

だと思っ」

「確かにな」

迷っている暇はなかった。後ろには夢魔がいる。他に道がないのだから、突き進むしかない。

ゆずると直久は小学校の校舎に向かって駆け出した。

後ろから何かが追ってくる気配を感じながら、昇降口をくぐる。幸い鍵が掛かっていず、もしも扉が開かなければ窓ガラスを蹴破る覚悟をしていた直久は、少し拍子抜けして校舎の中に駆け込んだ。

二人は急いで昇降口の扉を閉める。

そこで初めて追いかけてくるモノを振り返った。すると、先程の子どもの人形たちが、ぶっとい釘を持って、のろのろと追いかけてきていた。

直久が蹴り飛ばしたせいなのだろうか。腕のないもの。足が無く、這いずってくるもの。

頭が割れ、目玉が飛び出し、どす黒い液を垂れ流しながらやってくるものもいた。

壊れているからなのか、子どもの足だからなのか、『のろのろ』というのに相応しいほど、動きが鈍い。

あれなら、追いつかれる心配はないだろう。 けど、すっげえ

ー、ぶ・き・み。

「五寸釘だよな、あれって。丑の刻参りでもする気か？」

「せいぜい髪を取られないようにしろよ」

昇降口の鍵は螺子を回して開け閉めするタイプの鍵だ。ゆずるは人形たちの様子をチラリチラリと見ながら、螺子を回している。

直久も手伝って別の扉の鍵を閉めにかかった。繋いでいた手を離

すと、じつとりと汗が噴き出ていた。

「確か、この小学校には昇降口が3つあったよな」

「職員用のやつを含めたら4つだ。南校舎と北校舎に2つずつ」

この小学校は南校舎と北校舎がある。渡り廊下が4カ所にあつて、『目』の字を横にした形をしている。

「ここを閉めても他の所から入ってくるだろうな。けど、十分に時間稼げる」

「んじゃあ、さっさと逃げるか。……って、お前さー」

「あ？」

「その格好、動き辛くねえ？」

近すぎて見えなかったのか、あまりにもゆずるが自然に振る舞っていたからなのか、今の今まで気が付かなかったが、ゆずるは狩衣姿だった。

「よくそれで走ったな」

運動部の自分と同じスピードで駆けたのだ。毎日バスケット部で鍛えている自分と！ 駆ける、跳ぶ、泳ぐとは縁が遠そうなゆずるが！ 感心していると、ゆずるは肩をすくめてフツと笑った。

「俺は走っていない。体重を軽くして浮いていた」

「浮いていたあ？」

「お前は風船を持って走ったみたいな感じがしたはずだ」

「したはずだって……ええ？」

に、に、人間じゃねえ。

ゆずる風船がフワフワ浮いている図を想像して直久は一步後退る。ゆずるは笑った。

「確かに動き辛いかもな。着替えるか」

そう言つと、くりとその場で回る。

え？ 信じられんと直久は目を見張った。一瞬でゆずるの着替えが完了してしまったのだ。

狩衣から自分と同じ制服姿になったゆずるにもう一步、直久は後退った。

マジでえ？

自分たちの中学校は、女子はセーラー服で、男子は学ランと決まっている。

学ランは真っ黒な上着に、金色のボタンが6つ付いているやつだ。ズボンも黒い生地で、靴も黒いローハールを指定される。入学式や卒業式など行事の時にしか用のない帽子もあるが、これもやはり黒い。「お前、それ、楽でいいよな……」

毎朝の支度が早そうだ。ゆずるは軽く笑うと、直久に手を差し出した。

「行くぞ」

「あ、ああ」

直久はその手を取って、握り締めた。

南校舎の昇降口から入って廊下を右に行くと、2年生の教室が3つある。左に行くと階段があり、更に行くと職員室があり、校長室、事務室と続き、職員玄関がある。

二人は階段を駆け上がった。

2階は1年生の教室と図書室、図工室などがあって、その前を通り過ぎ、渡り廊下を走った。

北校舎の2階には、3年生の教室と4年生の教室がある。

ちなみに北校舎の1階は、今は使われていない教室が並んでいる。生徒が多かった時期にはフル活用していただろうそこは、少子化が進んでいる現在では物置と化しているのだ。

「1年の教室に居なかったということは、いったいどこにいますか？」

「莉恵ちゃん？」

他に誰を捜すんだ？という顔をされたので、直久は、そうだなあ、

と天井を見上げた。

「屋上とか？」

「屋上？」

「ほら、小さい子って高いところ好きじゃん。高い高いすると喜ぶみたいなカンジでさー」

「莉恵ちゃんをいくつの子どもだと思っっているんだ？ 優香と同じ年だぞ」

そう言っただけで呆れた顔をしたその顔が、直久の太股を見て眉をひそめた。

「お前、それ」

見ると、右足の太股のところがじつとりと湿っている。黒い制服のため目立たないが、よく見ると、その部分だけより一層濃い黒となっていた。

拭うようにそこに触れ、目の高さまで持ち上げて手の平を開くと、べつとりと赤く血が付いてきた。

「げ」

さっき自分そっくりの人形に鉛筆を突き立てられたところだ。

ケガをしていると気付いたとたん、痛くなるのは何故だろう？

直久は低く唸って、ゆずるの手を離すと、その場に足を投げ出してしゃがみ込んだ。

「いつてえー」

「気を付けろよ。お前がケガをすると、数も同じところにケガを負うんだからな」

ゆずるもしゃがみ込んで、そつと直久の太股に手を乗せた。ゆずるの手が熱い。

少し目を伏せ、じつと自分の太股の傷を見つめてくる。視線が熱い。ゆずるが触れている傷口から熱が広がって、体中が熱くなった。沸騰しそうだ。

息が苦しい。くらくらする。胸が激しく鳴る。痛い。胸が痛い。足の傷よりよほど痛い。

ゆずるの手に上に自分の手を重ねてみたくなって、直久は手を伸ばす。

どこでも良かった。手でなくとも。どこでもいいから、ゆずるに触れてみたくなったのだ。

だが、直久の手が届く前に、ゆずるは手を離れた。気が付くと、傷の痛みがひいていた。

「お？ 治った？」

「完全には治っていない。痛みは和らいだと思うが」

「おう、ぜんぜん痛くねえよ。サンキュー」

感謝を込めて笑顔を送ると、ゆずるは顔を赤らめた。

うわっ。ゆずるが照れてるう。な、な、なんか、可愛いかも。もしかして、数並みの可愛さ？

そりゃあ、いとこだし、顔の造りは似ているんだけど、今までゆずるを可愛いだなんて思ったことない。

つか、ゆずるってば、可愛くないし。

自分勝手に、オレ様な奴で、ひたすらムカツク奴なんだけど、なんか、礼を言っただけで照れちゃってるこいつは、なんか可愛いかも。

再び心臓がドキドキ鳴りだして、直久は胸をきつく押さえた。

やっぱあー、ゆずるなんぞにときめいてしまった。俺には数というダーリンがいるのに……。

数が聞いていたら、

「何バカなこと言ってるの？ 直ちゃん、あつたま、おかしいんじゃない？」

と、言われただろうことを心の中で喚いて、直久は頭を抑えた。明らかに様子のおかしい直久に、ゆずるは眉を寄せる。

「どうかしたか？」

覗き込んでくるゆずるの顔が直視できない。

俺はこいつが嫌いだったはず……。だった、って、なんでもう過去形になっているんだ？

ち・が・う・んだって、嫌いなんだって！ 『嫌い』進行形なんだって！

そりゃあ、見直したところとか、こいつもいろいろ大変なんだなあゝって発見したところとかあつてさ、前ほど嫌いってわけじゃないけど。

でも、やつぱり、傲慢で、我が儘で、人を見下した態度が嫌いだ。そうだ、嫌いなんだ。

はあゝい、問題解決！ 俺はこいつが嫌い。大好きなのは数オンリー！

よしつと気合を入れてゆずるの顔を見上げた。

「何だよ？」

急に顔を上げた直久に、ゆずるは少し怒ったような顔を返した。そして、手を差し出す。

「ゆっくり寛いでいる暇はない。行くぞ」

「そうだな。早く莉恵ちゃんを見つけてあげないとな」

そう言いながら立ち上がった直久だったが、ゆずるの手を取ろうとしない。

怪訝な顔をしたゆずるに直久は唇を歪ませた。

「動きづらいじゃん。繋いでつとさー」

「……そうだな。」

低く答えたゆずるの声を聞いて、どうしたのだろうか、胸が痛い。その痛みの原因をゆっくり考えている時間は、この時の直久には無かった。言いようのない不安と視線を感じて振りかえる。

すると、薄暗い廊下の先にピエロの姿が見えたような気がした。

ような……とか、気がした……とか、曖昧に言ったわけは、一瞬見えたピエロの姿は、見定めようと焦点を合わせたとたん消えてしまったからだ。

嫌な予感がして、反対側の廊下に振りかえる。ばおつと見えたピエロの姿は先程と同じように一瞬見えて、すうつと消えた。

再び気配を感じて、最初に振り向いた廊下の先に目をやると、や

はりピエロが一瞬姿を見せて、消えた。

気のせいか、先程より距離が縮まったようだ。

左右交互に振り向くたびにピエロが姿を現し、しだいに二人に近付いてくる。一瞬見えたピエロは両手に斧を持って笑っていた。

「直久」

「ああ？」

「さっき屋上とか言っていたよな？」

「ああ」

「行くぞ」

「へ？」

直久の答えを待たずに、ゆずるは駆け出した。ピエロから逃げるように階段を駆け上る。

直久は慌てて後を追った。

この小学校は3階建てだ。すぐに階段が終わり、屋上に出る扉が二人の前に立ち塞がった。

重たく、大きな扉だ。普段は鍵がかかっていて、生徒が無断に使用できないようになっていた。

だが、ここは夢の中だ。きっと開くはず。

開け！と強く思いながら、ゆずるが扉を開けるのを見守った。背後から何か得体の知れない気配が迫っていた。

「ゆずる！」

ピエロが来る。ピエロが！

笑い声が聞こえる気がした。斧を振り回す音が聞こえた気がした。

ゆずるがノブを回す。ガチャリ。鍵はかかっていなかった。ゆつくりと重たく扉が開く。

「なっ」

「どうした？」

扉の外を見て唖然としているゆずるの肩を押しやって、直久も外を見た。すると、そこは屋上などではなかった。何もない空間が広がっていた。

いや、何もないわけではない。星をちらばめた夜空と、数メートル下に待ち構えるプールがあった。

「なんで、この下がプールになっているんだよっ」

「俺が知るかつ」

迷っている暇はなかった。ピエロの気配が近付いてくる。笑い声が大きくなってくる。

「行こう」

「無理だ。こんな高いところから……」

「下はプールだから、ヘーキだろ？」

「20メートルの高さから落ちた場合、水はコンクリートと同じ硬さになるんだ」

「20メートルもねえよ。4階くらいの高さだから、10メートルくらいじゃん？」

嫌がるゆずるに直久は、はてと思う。

「もしかして、お前、高所恐怖症？」

「違う！」

「じゃあ、問題ないじゃん。行こうぜ」

ニヤニヤ笑う直久を殴ってやりたいと思うゆずるだったが、迫ってくるピエロのことを思うと、そんなことに時間を使っている余裕はなかった。

ゆずるは意を決して床を蹴った。身体が空に放り投げられる。それを確認して、直久も急いで後を追った。

7・そんなこと、俺に聞くな。俺に

基本的に、俺は陸を駆ける男だけど、水中も得意なわけで、そこそこ泳げるわけだ。

これ、ハッキリ言つて、自慢！ だつてさー、ほら、陸上部の奴とか、陸では敵無しみたいな奴に限つて、水泳が不得意な奴が多いじゃん。

俺んとこの学校じゃあ、2学期に水泳の授業評価が付くんだけど、1学期と3学期はめっちゃ良いのに、2学期だけ悪いの。水泳のせいださー。

そんな奴が多い中、俺は年間通して5段階評価の5！オール5！体育だけは5！

……だけは、つていうのが悲しいけど、まあそんなわけで、プールに投げ込まれた俺は問題無く、ドボンッと一度深く沈んでから、すぐに腕で水をかき、水面に顔を出した。

「はあっ」

大きく息を吸ってから、プールサイドまで泳ぐ。信じられないことに足が底につかないのだ。学校のプール、しかも小学校のプールとは思えないほどの深さである。底を見ようとしても、暗闇が見えるだけだった。

プールサイドに泳ぎ着くと、直久はゆずるの姿を探した。

自分より先に飛び込んだはずのゆずるの姿がないと気が付いたのは、自分の呼吸が確保されてからしばらくたった後だった。

「ゆずる？」

まさか……。

ゆずるがプールに飛び込むのを渋っていたのは、高所恐怖症だからじゃなくて、泳げないからではなかったか？

直久は青ざめる。本当に血が引いていく感じがした。

「うそだろ？ 泳げないのかよ？」

直久は再び水中に顔をつけて、ゆずるの姿を探した。

水面から見つからないとすれば、深く沈んでしまったのだらう。

両腕を掻き、深く潜る。

泳げないのなら、泳げないって言えっーの！

だが、ゆずるのプライドの高さから考えて、できないとは言えなかったのだらう。

察してやれなかった自分が悪かったのか？

いいんや、んな

わけがない！

あいつのプライドの高さが悪いんだ！

ブツブツ言いながら、直久は水を蹴った。光が遠くなっていく。

暗闇の中、弱々しく光るものを見つけて、手を伸ばした。

たぶん、ゆずるだらうと直感する。ゆずるは直久から見て、いつだって光の中で生きていたから……。

思った通り、それはゆずるだった。

力一杯に水を掻き、ゆずるの体を引き寄せると、直久は水面を見上げた。

遠い。気まで遠くなりそうな距離だ。だが、ここで気絶している場合じゃない。絞り出した力で水を蹴る。

片手でゆずるを抱きながら、もう一方の腕で水をかく。苦しい。息が。

酸素が欲しくて、半ば藻掻くように、上へ、上へ、泳ぐ。

「はあっ」

口が空気に触れたと同時に、水もろとも酸素を肺の中に詰め込む。

「ぐっ。げほっ。ごほっ、ごほっ」

あまりの苦しさに涙が流れ出た。咳き込みながら、やっとの思いでプールサイドにたどり着くと、まずはゆずるを水から上げ、自分も上がる。

「おいっ」

呼ぶが返事がない。揺すっても反応がない。

息は？ 口元に顔を近付ける。していない……？

心臓は？ ……動いている。弱々しくはあるが確かに動いている。

わずかにホツとして、直久はゆずるの頬を叩く。

「ゆずる、おいっ。しっかりしろよ」

どうするんだよ、こういう時！ もっとしっかり真面目に保健の授業を聞いとくんだった。今更ながら後悔する。

こういう時はやっぱし、人工呼吸か？ 心臓マッサージは心臓が動いている時はしちゃいけないんだよな。

人工呼吸なのか？ やっぱし。するのか？ 俺が？

っーか、俺しかいねえーし！ 俺がやるしかないんだよな。

直久はゆずるの顎に手をかける。

「……と、その前に襟元開けた方が良いのか？」

学ランは詰め襟だから、普通の時でさえ苦しい。

直久などは上の方の金具は止めないで、できるだけ緩ませてしま
うそれを、ゆずるは律儀にしっかりと閉めていた。震える指でそれ
を外す。

ボタンは？ ……2つくらい開けてやるか。

金ボタンに手をかける。ボタンを外すと上着が開き、ゆずるの喉
元が露わになった。

上着の下は白いシャツを着ている。濡れたそれは、肌色を透かせ
ていた。再びゆずるの顎に手をかけ、上を向かせる。いつか読んだ
教科書の挿絵を思い出しながら、直久はゆずるに顔を近付けた。

直久の髪から落ちた雫がゆずるの頬の上を滑るように流れる。そ
れを見送ると、直久は大きく息を吸い込んだ。直久の影が、ゆずる
にゆっくりと覆い被さった。

「んっ」

何度か息を吹き込んでいると、うめき声が聞こえた気がして、直
久は口を離した。

とたん、ゆずるは水を吐き出し、咳き込んだ。

「げほっ。げほっ」

「ゆずる、大丈夫かよ？」

返事はなかったが、規則正しく聞こえてきた呼吸に直久は安堵する。

よかつた。

濡れて冷え切った身体を抱き締めた。しばらくの間、暖めるようにさすっていた直久は、ゆずるの身体の不思議な触感に気が付いた。

なんでこいつ、こんなに柔らかいんだ？

細い、細いとは思っていたけど、マジで筋肉ないよな。男なら、

もっとガツチリしてた方がいいんでない？

っーか、なんでこいつ……。

もつとよく確かめようと、肩から腕、腹筋へと触れているうちに胸へと手が伸びた。

え？

他の部分とは比べようにならない柔らかさを感じ取って、直久の思考回路が停止する。

ええ？　なんだ、これ？

手だけじゃなくて目でも確かめようと上着の中を覗き込む。見え難いと思い、ボタンに手をかける。

上から3番目のボタン、4番目のボタンと、ゆっくりと外していく。すべてのボタンを外し終わると、上着を左右に開いた。思わず唾を飲み込んだ。

すっかり透けてしまった白いシャツ。くつきりと形を露わにした肌。

「マジかよ……」

濡れたシャツは肌色を透かせながら、胸の辺りで膨らんでいた。その山のとっぺんのピンク色の丸い小さな突起に、直久は顔を赤らめる。

「マジでえー？」

これも夢だからか？ そうなのか？ 夢だから、ゆずるが女にな
っちまったのか？

そうなんだよなあ？ ああーっ、もおーっ、今、ここに数がいて
くれれば！

んで、

「そうなんだよ、直ちゃん。夢ってすごいよねえ。いろんなことが
起こっちゃうんだから」

……っ、言って欲しい！！

数う、俺はどうすればいいんだあゝっ。

「んー」

「うわっ！」

「痛っ」

ゆずるのうめき声に驚いた直久が思わず手を離れたために、ゆず
るの身体が固いタイルに打ちつけられた。

すぐに謝ろうと口を開くが、言葉が出てこなかった。

痛みを感じたおかげで、意識を戻したらしいゆずるは、ゆっくり
と身体を起こす。

その拍子にハラリと上着が大きく開いて、胸が露わになったのだ。
見たくない、いや、見るつもりはないのに、直久の目は自然にゆ
ずるの胸へと向けられてしまう。

「お、おま、お前っ」

「なんだよ？」

口を開いたり閉じたりして、言葉にもならない声を発している直
久に、ゆずるは眉を寄せる。

「そ、それ。っーか、何それ？」

「はあ？」

直久が指差すものを追って、自分の胸元を見る。その瞬間、ゆず
るは頭の中が真っ白になる。

透けて見える自分の胸の輪郭に驚き、声も出ない。慌てて上着の

前を掻き合わせて、直久を睨んだ。

「見たのか？」

見ていないはずはないと知りながら、見ていないで欲しいと願う。声も、身体も震えてしまう。ゆずるは返答次第では殴ってやろうと固く握り拳を作った。

その時、ゆずるの頬を流れていったものは、水の雫だったのだろうか？

それとも、瞳から溢れ漏れたものだったのだろうか。

緊張した面持ちで答えを待つゆずるに、直久は頭を縦に振り落とした。そして、ゆずるの想像の域を超えた言葉を言い放ったのだ。

「お前、女になってるぞ」

「はあ？」

「女になってる。これも夢だからなのか？」

「ゆめ……？」

「もしかして、俺もいきなり性別が変わっちまったりするのか？」

直久の真剣な顔に、ゆずるは小さくため息をついた。

「……お前がバカで良かった」

「へ？」

聞き返した直久にゆずるは、なんでもないと手を振ると、胸元を閉じてからゆつくりと立ち上がった。

「大丈夫なのか？ その、苦しいとか、どっか痛いとか？」

男が女になってしまったのだ。ただ事じゃない。あたあたと慌てふためいている直久に、ゆずるは笑う。

「ホント、ばか、お前」

「人が心配してるつーのに、そういうこと言うか？」

そう言っただけ直久が眉を歪ませた時、さあーと風がどこからともなく吹き抜けていった。

「風通いか」

直久から目を逸らし、どこか空を見上げると、見えない相手と話を始めるゆずる。

「そうか、分かった」

「どうしたって？」

その相手との会話が終わるのを見計らって直久が尋ねると、ゆずるはホッとしたような笑顔を見せた。

「莉恵ちゃんが見つかったらしい。今、先見がここに連れてくる」

「莉恵ちゃんが？ そっか」

ゆずるの式神たちが見つ付けてくれたらしい。直久もホッと息をついた。

しばらく待っていると、酒の臭いと共に空を浮いた子どもの姿が二人の前に現れた。

「ご苦労」

二匹の式神にねぎらいの言葉をかけると、ゆずるは両腕を差し出して、莉恵の身体を受け止めた。

トサツ、と柔らかな音を立てて莉恵は、ゆずるの腕の中に収まる。

「莉恵ちゃん」

穏やかな声で名前を呼ぶと、幼い少女は涙で濡れた顔をゆっくりと上げた。そして、ゆずるの顔を確認すると、驚いたように目を見開いた。

「優香ちゃんのお兄さま？」

「そっだよ。大丈夫？ ケガはない？」

ゆずるは莉恵を腕から下ろすと、目線が合うように膝をついた。

莉恵は首を振った。

「りえのこと、助けに来てくれたの？」

「そっだよ。遅くなってゴメンね。可哀想に、怖い思いをしたんだね」

次々に溢れ出てくる涙をそっと拭いてやると、ゆずるは莉恵を安心させようと抱き寄せた。

「もう大丈夫だから」

今度は頭を縦に振って、莉恵はゆずるの肩に額を押しつけ、ひし

つとしがみついてきた。

ゆずるはその背中を軽く叩きながら、直久を見上げる。

「掃除用具箱に隠れていたらしい。何かに追われていた様子だったと風通いが言っていた」

「何かって？」

「おそらく、夢魔だ」

直久の脳裏に、あのピエロの笑いが浮かぶ。白い顔に黄色い歯を剥き出しにして、甲高い声で笑うのだ。

思い出すだけでも、ぞっとする。

笑顔のままで斧を振り回す姿。おどけた様子で、ふざけた口調で殺気を振りまく。

もう二度と会いたくない。

「ピエロに見つかる前に、とっとと夢から逃げようぜ」

「そうだな」

ゆずるも同じ思いなのか、莉恵を片手で抱き締めながら、もう一方の手を直久に差し出した。

どさつ。

不意に、何かが空から落っこちて来た。どす黒い塊。それが何かと目を向けると、猫の死体だと分かった。

ゆずるは慌てて莉恵の目を塞いだが、遅かったようで、空気が避けるような悲鳴が上がった。

どこからか、笑い声が聞こえてきた。あのピエロの笑い声だ。パノンと名乗ったピエロの。

「ねこふんじやった。ねこふんじやった。ふふつ。ほらほら、見てごらん。お空に飛んじやった猫が降りてきたよ。でもね、勢いよく降りてきたものだから、ぶつつぶれちゃった。おかしいね。ペ

ツタンコだよ。おもしろいね。目ん玉飛び出しちゃってるよ」

パノンの言う通り、血塗れになった猫は頭が碎け、目玉が飛び出し、腹が裂け、内蔵がはみ出ている。

ゆずるは猫から目を背け、空に向かって怒鳴った。

「どこにいる？ 出てこい！」

ゴボゴボと水音がした。何かと思い音の方を振り返る。プールの方だ。

プールの中を覗き込むと、ずっと下の方にピエロが沈んでいて、じつとこちらを見上げていた。

にやにや、とピエロが笑った。その笑顔を崩さないまま、ピエロの体がすうーっと浮上する。

大きな水音をたてながら、ピエロは水から姿を現し、そのまま水面の数センチ上で体を浮かした。

水の中にいたと言うのに、少しも衣類を濡らしていなかった。ゆずるは舌打ちすると、莉恵を庇うようにパノンと対峙する。

「確か、お前、俺の肉が食いたいだの言っていたな。あいにく、お前に食わせられるような無駄な肉はない。この子の夢から、すぐに出て行け！」

そう言うつと、ゆずるは先見と風通いを呼ぶ。ほぼ同時に、激しく風が吹き荒れた。

これを『かまいたち』とでも言うのだろうか？ パノンの肌がスツパリ切り裂かれた。

だが、痛みを感じていないらしく、ニタニタ笑い、大きく腕を振り上げた。

右から左へ、何かに指示を与えているようだった。それに気付いた時、猫の頭がゆずる目掛けて飛んできた。

直久は慌ててゆずるの前に飛び出す。猫の頭はグワツと口を大きく開けて、直久の腕に噛みついた。

「痛っ」

「直久！」

直久の腕から引き離そうと、ゆずるが猫の頭を掴むと、瞼のない猫の瞳がギロリとゆずるを睨み上げた。

血走った目に一瞬怯むと、その間に猫は、ガブリガブリと直久の腕を噛み直した。

ポタポタと直久の腕から血が滴る。

「こいつ！」

今度は力一杯引き剥がしにかかる、猫は散々抵抗したあげくにやっと剥がれ落ち、地面にゴロゴロと転がった。すかさず、直久はその頭を遠くに蹴り飛ばした。

「大丈夫か？」

「お前こそ」

直久に言われて手の平を見ると、猫の牙に裂かれたのだろう、小さな傷がいくつも付いていて、血が滲んでいた。

「俺は、大したこと無い」

ゆずるがそう答えると、パノンがケラケラ笑う。

「そうだよね、全然大したこと無いよね。もっと痛くならなきゃ。苦しまなきゃ」

ほおら、とパノンは斧を振り上げた。ゆずるは両手を広げる。

「火刈り、炎を！ 風通い、風をあの腐れピエロへ！」

声を張り上げると、ゆずるの手の平から炎が現れ、風が吹き荒れ、熱風となってパノンを襲う。

パノンが放った斧は熱風を切り裂き、ゆずるの足下に突き刺さった。

「相殺？」

いや、向こうの方が少しばかり力が上だ。直久は猫に噛まれた傷口を押さえながら、呻いた。

勝てない。逃げることも難しいだろう。

「火刈り、炎を！」

再び、ゆずるが炎を放つ。

「先見、風通い、行け！」

巨大な火の玉と、それを取り巻く熱風が刃のようにピエロを切り裂き、その切り口から肌を燃やしていく。

異様な物が焦げる臭いが辺りに漂った。だが、ゆずるの攻撃はパノンの笑い声を止めることさえできなかった。

「次は2本いっぺんいくよ」

ケラケラ笑って両手に一本ずつ斧を振り上げる。

「ほおら、受け取れ！」

パノンの手から放たれた2本の斧は、回転しながらゆずるの元へ飛んでいく。

「ゆずるっ」

駆け寄って、身を挺して庇ってやりたかったが、直久の体は思うように動かなかった。

地面から生えた何本もの腕が直久をつかみ取って、その動きを封じていたのだ。

「くそっ」

だめだっ、と目を閉じた時、白い影が直久の脇を擦り抜け、ゆずるの元へ駆けていった。

「ん？」

そつと目を開くと、斧がゆずるの両脇に突き刺さっていた。啞然とするゆずるの目と目が合う。

「雲居が、雲居が助けてくれた」

「雲居が？」

どうして数の式神が？

直久が首を傾げている間に、ゆずるは雲居と言葉を交わし、大きく頷くと、礼を述べた。

「お前がケガをしたことで、数が、夢魔と俺たちが接触したことに気が付いたんだ。それで雲居を寄こしてくれたんだ」

「なあ」

腕の傷を眺めて直久も頷く。

依然として血が止まる様子はない。ボタボタと流れ続けている。

これだけの傷を負ったのだ。数久もただ事じゃないと気付いてくれたのだろう。

「雲居、あいつをやつつけるのに協力して欲しい。火刈り、風通い、先見。一斉攻撃だ」

行け！とゆずるが命じると、ごおーと低い唸り声と共に熱風がパノン目掛けて駆け抜けていった。式神4匹による一斉攻撃にさすがのパノンも恐れを感じたのか、ここで初めてその顔から笑みを消した。

「君がそんなにたくさんおともだちを呼ぶのなら、僕だって呼んでやる」

風から逃げまどいながら、指笛を吹く。すると、プールの底から人形たちが這い上がってきた。

直久はクスクスという笑い声に自分の足下を見た。

自分の体を戒めていた地面から生えた手がニユルリと長く伸び、肘が出、肩が出、頭が地面から出てきた。

「捕まえた。捕まえた。絶対に離さないんだから」

子どもの姿をした人形が3体、直久の体に長い腕を絡ませて歌いだす。この夢では何度も聞かされている『ねこふんじやった』だ。

くっそー。もう耳ダコだくっつ。

引き離そうと人形の体を押しやるが、人形はベツタリ直久にくっついて離れない。それどころか、ますますきつくしがみついてくる。

ゆずるの方もプールから這い上がってきた人形にジリジリと間合いを詰められている。ゆずるの助けは期待できないと分かった直久は、両手を組んで高く振り上げた。

ドスッ。

それを首の付け根に打ちつける。人形が怯んで力を弱めた隙に蹴り飛ばす。人形は高く舞い上がり、地面に転がった。仰向けに転がった人形の顔がみるみるうちに猫の顔になっていく。

ねこ？

「こいつらの正体、猫なのか？」

「猫……？」

呟くように言った直久の言葉を聞き取ってゆずるは聞き返した。

「なんで、猫？」

そんなこと、俺に聞くな。俺に。

とにかく人形たちの正体は猫らしいと判断したゆずるは、先見を呼ぶ。

「猫には犬だ。猫を追い払え！」

すると、ゴールデンレトリバーなどの大型犬よりも更に大きな茶色い犬が姿を現す。

茶色というより赤に近いかもしれない。首回りだけは他の部分より濃い茶色で、長い毛を全身に生やしている。

二三歩足踏みをする、犬は大きく口を開いた。

『犬じゃねえー！オレは狼だあああ~~~~っ』

直久にも聞こえる声で吠える。

ピンと三角にとんがった耳。鋭い牙。本人が言うように、狼にも見えなくない。

ゆずるは額を抑えた。

「いいから行け！」

『へいへい』

先見はガバツと口を開いて直久にしがみついていた人形を追い払うと、ゆずるに這い寄ってきていた人形も追い払う。

思った通り正体は猫だったらしく、先見が脅すと、猫の姿になって一目散に逃げていった。ゆずるは空に浮いているピエロに向き直って、睨み上げた。

「お前の“おともたち”とやらは、お前を置いて逃げていったぞ」「まったく、ヒドイ友達だよ」

ゆずるの瞳を真っ直ぐに受け止めて、パノンは泣き真似をする。

「代わりに君が“おともたち”になってくれるかい？」

「断る！」

「マジでえ？」

信じられないと聞き返した直久に、ゆずるは肩をすくめる。

「確かなことは、分らない」

そして、見えない相手を振り返った。

「4人ともご苦労。戻っていい。雲居、一足先に戻って数に礼を言ってくれ。俺たちもすぐに戻ると伝えて欲しい」

さあーっと風が吹き抜けた。

見送るように、しばらく何も無い空間を見つめていたゆずるが振り返ると、直久はホッと息を吐き出した。

やっと夢から出られるのだ。

ゆずるは莉恵の前に膝を着くと、その肩に両手を乗せた。目線を合わせる。

「さあ、莉恵ちゃん。起きる時間だよ」

「起きる？」

「君は今、眠って居るんだ。ここは夢の中なんだよ」

「夢？」

「そう」

ゆずるは、直久に振り向くと手を差し出した。直久はその手を取った。

「目を開いて。さあ」

ゆずるは莉恵の額にもう一方の手を置いて、ゆっくりと瞼を閉じる。

澄んだ声が流れるように聞こえてきて、それは徐々に小さくなって、やがて聞こえなくなっていく。

8 どういふことだよっ、ゆずる！

気が付くと、目の前にゆずるの顔がドアップにあって、一気に目が覚めた。

押さえつけられているかのように、体が重い。動かないのだ。

「直ちゃん、気が付いたの？」

「……か……ず」

うわっ。うわっ。なんか、すっげえー久しぶりに数の声を聞いた気がするう。

数う、すっげえー、すげえー、会いたかったよ。尻尾があつたら絶対振ってるって！

すっげえー嬉しい。帰ってきた！ってカンジ。

すぐにでも数久に飛び付いて、抱き付きたいのに、直久の体はピクリとも動かない。

なんなんだよ、いったい！

動け、動け、と念じていると、すーっとゆずるの瞼が開いた。

「ゆずる、手、離せ。手！」

「あ、ああ」

繋がっていた手が離れると、直久の体は自由になる。とたん、ガバツと起きあがり、数久に飛び付く。

「数う」

「な、直ちゃん」

困ったように顔を見せたが、兄の体を抱き留めて数久はホッと息を吐いた。

「直ちゃん、お帰り。よかった、無事で」

「数う」

だが、すぐに直久は数久の腕に傷を見つける。萌葱色の着物が血で赤く染まっているのだ。嫌でも目に付く。

「数、どこをケガしたんだ？」

青ざめて詰め寄ると、後頭部をパコツと叩かれた。

「ケガしたのは、あんたの方でしょ」

「り、り、りんかぁ！」

何事かと後ろを振り返ると、双子たちの姉　　鈴加が腕を組んで

佇んでいた。

「なんで、鈴加がここに？」

「莉恵ちゃんの家のお裾上げが済んだ報告に来て貰ったんだよ。莉恵ちゃん、もう大丈夫だからね」

数久は莉恵にニッコリ微笑んだ。莉恵はパツチリと大きな目を開けて大きく頷く。

それを見て、優香もホツとしたように笑って、莉恵の手を握った。

「りえちゃん、よかったね」

「ゆうかちゃん。りえ、すごく怖い夢、見てたの」

「もう大丈夫だよ。りえちゃん、りえちゃんのパパとママ、あつちの部屋で待っているよ」

「ホント？」

「うん、行こう」

優香が莉恵の身体を支えるようにして、二人はパタパタと部屋を出ていった。

その後ろ姿を見送って、ゆずるは柔らかに微笑んだ。鈴加と、その後ろにいる貴樹に振り向く。

「鈴加さん、貴樹さん、お手数をおかけしました。お疲れさまです」

「ゆずる君こそ、お疲れさま。いったい何があったの？　びしょ濡れよ」

鈴加に指摘された通り、ゆずるも直久も全身びしょ濡れだった。

ずつしりと紫紺の着物を摘み上げると、ゆずるは眉を寄せた。

「今、お風呂を涌かしているわ。すぐに入ってらっしゃい」

「はい」

ゆずるは鈴加の言葉に頷くと、気怠そうに立ち上がり、部屋から出ていった。その姿を見送りながら、直久は首を傾げる。

夢の中では、ゆずるも自分と同じ制服に着替えたはずなのに、現実世界ではまた狩衣を着ていた。

やはり、夢は夢。夢で起きたことは現実とは異なるのだ。そう、納得する。

その証拠に今の今まで痛いと思っていた傷も、目が覚めたとともに痛くなくなっている。

腕を捲ってみるが、傷などまったく無かった。

「俺、ケガなんかしてないみたい」

「直ちゃんにとって、夢だったからね」

数久は苦笑して、直久の額に触れる。何かをふき取るかのように数回そこを拭くと、数久の傷もみるみるうちに消えて無くなっていた。

「夢の中でケガをすると、その時は痛いって思っちゃうんだけど、目が覚めると、やっぱりそれは夢で、どこもケガなんかしていないし、痛くもないんだ。　　けど、僕にとってケガは現実で、直ちゃんの夢が覚めてもまだ痛いんだ。術を解くまではネ。術を解いてしまえば、元々は直ちゃんが負ったケガ、僕はどこも傷付いてはいない」

ほらね、と数久は自分の腕を見せて笑った。　　生白く、きれいな腕を見て、直久も笑う。

「直ちゃんと繋がっていいよと思って、直ちゃんがケガをすれば僕も同じケガを負うように術をかけたら、ひどい目にあったよ。ある程度は覚悟していたけど、想像以上だった」

「悪い」

「直ちゃん、むちゃし過ぎ」

「けどさ、おかげで夢魔と対決してんの、分かっただろ？」

「僕の雲居は役に立った？」

「すっげえー、大活躍。けど、夢魔には逃げられちゃった」

「逃げられた？」

双子の会話を黙って聞いていた貴樹が、怪訝そうに顔をしかめた。

「そいつは、いったいどんな夢魔だったんだ？」

「ピエロの格好したふざけた奴さ」

「ピエロ？」

「パノンって名乗っていた」

「パノン……」

顎を軽く掴んで黙り込んだ貴樹の袖を、鈴加が引つ張る。

「なんか知ってるの？ 一人で考え込まないでよ」

「どこかで聞いたことがあると思って……。いや、聞いたんじゃないな。読んだんだ」

「読んだ？」

「確か、誰かの日記だったはず」

「日記？」

姉弟3人の声が綺麗にハモった。

「あんたが本を読むのを趣味としているのは知っていたけど、他人の日記まで読んじゃう人だとは知らなかったわ」

「人聞きの悪い言い方をするなよ。日記と言っても、1000年近く昔の日記だ。記録みたいなものだろ？ 確か、九堂家の蔵で見つけたんだ。何年も前のことで記憶に自信はないけど」

「蔵でえ？ どこにあった物か分からなくなると、すぐ蔵にあったことにしちゃうんだから」

そう言つて肩をすくめた鈴加を横目に、数久は貴樹に確認するように聞き返す。

「1000年前の日記に書かれていたってことは、その夢魔は1000年前にも姿を現したってことですよな？」

「そういうことになるな」

「そっいゃー、あいつ、九堂家の者の肉を食うとか何とか言っていたぜ」

「肉？ もしかして、ゆずるのことを食べようとしていたの？」

「えー、そうなの？ やっであゝ。何ソレ！じゃあ、莉恵ちゃんは
囹で、本命はゆずる君だったの？ でも、なんで、ゆずる君を食べ
たいの？」

「なんでも、食えば強くなれるとか何とか」

「そんな三蔵法師じゃあるまいし」

「なんで三蔵法師？」

首を傾げた直久に数久が口を開いた。

「徳の高いお坊さんの血肉を喰らうと永遠の命を得られるとか、強
くなれるとか、そういう話が『西遊記』の中で出てくるんだよ」

「へー」

けど、ゆずるは坊さんじゃないわけだし、食ったって仕方がない
じゃん。

そう思っていると、貴樹が、とにかく、と言って襖を開けた。暖
かい風が部屋の中を駆けめぐる。

「俺はもう一度その日記を探してみようと思う。倒せたのならとも
かく、逃げられたのなら問題だ。再び現れるかもしれない」

「そうね、私も手伝う」

「邪魔はしないでくれよ」

「しないわよつ。手伝うの！」

貴樹の後に続いて鈴加も部屋から出ていく。

数久と二人つきりで取り残されて、直久は足を投げ出して後ろに
倒れ込んだ。全身が重たく、怠かった。

「びしょ濡れの格好で寝ないでよ。畳が濡れる。　　って、もう濡
れて、ひどい状態だけど」

「数は俺より畳の心配をするんだあゝ」

「だあって、畳って汚れると見苦しいじゃん」

「……」

「あと、直ちゃんの制服、濡れちゃったね。明日も学校あるのに。
どうしようか？」

「しばらくジャージ登校するから良いよ。母さんに頼んでクリーニ

ングに出して貰う。つか、制服より、俺の心配は？ 風邪ひかないようにネ、とか、ないわけ？」

「直ちゃんが風邪ひくわけないじゃん」

「……」

あ、なんか、イジケてきた。

重たい体を起こして、よたよたと立ち上がると襦に手をかける。

「どこ行くの？」

「俺も風呂入ってくる。濡れてて気持ちわりー」

「そう」

パシヤンと襦を閉められて、数久は、はてと気付く。

「え？ お風呂？」

今、お風呂には、確か。

「ちょ、ちよつと直ちゃん、待つ……」

追いかけようと襦を開けて廊下に出たが、もはや、すでに直久の姿はなかった。

数久はカリカリと頭を引っ掻く。

「ま、いいか。なんか、もう、僕も疲れちゃったし」

と、その場にしゃがみ込んだ。

春の風が吹き込んでくる廊下を直久は、重たい足を引きずりながら風呂場に向かった。

どこからか白い花びらが舞い込んできて、直久の目の前でくるりと踊った。

庭にある桜の木からだろうか。桜を怖がっていたゆずるを思い出して、一人笑う。

どこが怖いんだ？ やっぱキレイじゃないか。

やたら広い九堂家の庭を眺め、桜の木を仰ぐ。

幼いゆずるが襲われたという魔物は、あの桜の木に取り憑いていた魔物だったのだろうか？

九堂家の回りには特別な結界が張ってあって、低級な魔物は入り込めないと言っていたから、あの桜の木ではないのかもしれない。そんなことを考えながらも、直久は脱衣所にたどり着いた。

中に人の気配を感じたが、どうせ、ゆずるだろうと思って扉を開けた。

ゆずるは普段、他人に自分の肌を見せるのをひどく嫌がっていたが、今は緊急事態だ。我慢して貰おう。

春とは言え、まだ肌に寒い。

さすがの直久だって、いつまでも濡れたままでは風邪をひきかねないのだ。

同じ男なんだし、一緒に風呂くらい……。

そう、直久は思った。

「ゆずる、わりー、一緒にさせてくれ」

ガチャリ。扉が開く。

「え？」

「ん？」

驚いたゆずるの瞳と目が合う。

その瞳はしだいに恐れの色を露わにして、次には怒りの色をして、ひどく悲しそうな色を示した。

一方直久は、ゆずるの瞳から顔全体、首、肩、そして、胸、腰……と視線を徐々に下へ、下へと下げて、再びゆずるの顔を見た。

「嘘だろ？　なんで、お前……」

ゆずるは、今まさに脱衣所から風呂場に移動しようとしていたところで、一糸纏わぬ姿をしていた。

すぐに我に返り、側に置いてあったタオルで身体を隠すが、すべてが直久の目にバッチリと焼き付いてしまった後だった。

膨らんだ胸。男ならあるはずのものが無い身体。

「お前、女？　だって、あれは夢だって……」

「とにかく、ここから出て行けよ」

静かに、低く、ゆずるが言い放った。

「え？ あっ、ああ。ごめん」

頭の中が真っ白になってしまい、なんて言ったらいいのか分からなかった。

とりあえず謝って直久は脱衣所の扉を閉めた。それから、一度大きく深呼吸をすると、深く息を吸い込んだ。

わあああああゝと叫びながら、やって来た廊下を逆走する。ど、ど、どういっこっちゃあゝっ！ ゆずるが、ゆずるが女だったなんて！

数久でも、鈴加でもいいから、詰め寄ってきちんと聞いてみたかった。

ゆずるはいつから女だったのか？と。お前は知っていたのか？

本当に、本当に、ゆずるは女なのか？と、一刻も早く聞きたかった。

ざあーと、風が直久の脇を吹き抜けていった。

はっとして直久は立ち止まる。風の吹いてきた方を振り返ると、例の桜の木がじっと佇んでいた。

直久を見守るかのように静かにそこに立っていて、慰めるかのように花びらを散らす。

濡れた衣服に花びらが何枚も何枚もぺたぺたとくっついた。

直久は足を投げ足すようにして、その場に腰を下ろした。春風が頭をやさしく撫でていく。

どのくらいそうしていただろう？

名前を呼ぶ声に、直久は我に返った。見上げると、すぐ傍にゆずるが立っていた。

「あ」

口を開いたものの言葉は何一つ出てこなかった。

直久は諦めてゆずるの言葉を待つことにした。そんな直久にゆずるはため息をついた。

「俺は男だ」

「けど」

そうは見えなかったと顔を上げると、ゆずるに、黙れ、と睨み付けられる。

「男として育てられた。だから、これからも男として生きていく」

「育てられたって？」

「九堂家に必要なのは女子じゃない。後を継ぐことのできる男子だ」
「だからって！」

だからって、男として育てられたというのか？ 本当は女なのに？

何かを言おうとした直久から、ゆずるは目を逸らし、その言葉を封じた。

「お前が俺を男として見られないと言うのなら、もう二度と俺の前に姿を現すな。本家への出入りも禁じる。祭儀にも出席するな」

「なんだよ、それ！」

元から本家への足は遠く、行事にも不参加な直久だが、出るな、禁じる、と言われるのはおもしろくない。

問い詰めようとしてゆずるの方へ手を伸ばす。だが、バシンとその手を叩かれた。

「痛っ」

「触れるな！」

吐き捨てるように短くそう言うと、ゆずるは直久に背を向けて去っていった。

「どういうことだよっ、ゆずる！」

その背中に向かって怒鳴るが、届かないのか、ゆずるは振り向きもしなかった。

大嫌いなゆずる。

顔も見たくないイトコ。
話したくないし、声も聞きたくない。

大嫌い。大嫌い。すっげえー、ムカツク。
そう思っていた。それなのに……。

叩かれた手が痛い。遠ざかっていく背中が苦しい。

ここ数ヶ月で近付いたと思った二人の距離が、ゆずるが一步、また一步と遠ざかっていくほどに、引き離されていく感じがした。

桜の花びらが舞う。今はもう、それをキレイだとは思えなかった。

地面を覆い隠すように、自分もその花びらで覆い隠してくれ。そう願って、直久はその場に転がる。

なんだか、ひどく身体が重たかった。もう二度と起きあがれないかもしれない。

そう思いながら、ゆっくりと瞼を閉じた。

静かな静かな廊下に、桜の花びらが積もっていく音だけが、直久の耳元で響いていた。

【完】

8. 虫狩り (後書き)

『虫狩り』 (http://ncode.syosetu.com
/n6689d/) へ続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6626d/>

春眠

2010年10月8日14時19分発行